



上代衣服考

全

リ 11  
1546





官許

豊田藏板

上代衣服考

全

一名神服考



乙地のそ〜め天以理乃咩命神衣考  
 天日鷲命荒妙衣考  
 倭文部古幡部忌部考  
 神業考  
 吳工織衣考  
 女衣考  
 神衣考  
 豊田の考  
 神衣考



此一ツ石上ふもあつては上代衣服考よ  
まを著<sup>僕</sup>の文室よもつてはなつたに  
るやうに完ふに尺瓊の五百は清経るれよの  
まのちのみあふらふ悟されつと出の何あよ  
巻のよよかなきよぬ

明治二年六月

彈正丸穂穂後臣真年

此の書は... 上代衣服考... 尺瓊の五百... 清経るれよの... 悟されつと出の何あよ... 巻のよよかなきよぬ

は... 神代... 尺瓊の五百... 清経るれよの... 悟されつと出の何あよ... 巻のよよかなきよぬ



さきにもあはれしくしむるはあはれ  
しむるはあはれしくしむるはあはれ  
のあはれしくしむるはあはれ  
乃ちあらむまはれしくしむるはあはれ

明治二年十二月 大學中助教三川有造

豊田公羽乃若者有之時を以て國に  
學子間に心入られしをた乃か父昌備  
深久愛方よりしむるはあはれしくしむるはあはれ  
吾々も縣居大人の富士に高根、雷  
の音もて流雲乃上をこゝに讀歌か  
しむるはあはれしくしむるはあはれ  
いふ多世に生れぬ昔は父もはや  
たあまを成ぬるはあはれしくしむるはあはれ



ふ灸を擡りて已に談らる久負氣  
な久もか久物おもくを思に先  
年事事以正久た乃驗めてさ  
大人乃尊靈おもかたむいた  
る此由緒一言のまてふさ  
つに社に辭かた九て聊は  
あけひるお那母柳は此の常  
萬をねまて清支事その  
好

も社る餘の掛巻も恐き神呂岐乃  
尊の摠原の故事に依て書さる  
名を摠舎やと号けりたをまをも  
庭に植生れもてあるは枝もをか  
くまの調度なむ作ると人以母  
樂る社朝夕尔大直昆乃神の  
乃ふ由を古し祈きて今も  
考へ成たるは甚も甚も奇く



功に如くありて然、此の如くありて今  
よるは富士の高根の如く鳴神乃如  
弥高久安ふの社ありて遠く御音  
和たれば年あはき何れ社愛ふ  
或一のも貴支か母明治乃二年  
学ふ年能冬か久志ははを静岡  
藩士族蜂屋昌史

この社を世の人のよきいふありんを  
て考へし人よきいふの如くなん有る。鹽田  
の神字教いふよきいふの如く古に志  
る人よきいふの如く考へてふの如く  
よき人はけらなりつゝいふの如く家  
よきものなる如くいふの如く時代の衣服の制  
もよきいふの如く考へてふの如く一書を  
かき出らるゝ也。この如く考へてふの如く











我国太刀城  
等むハ神達  
みあらひ奉  
るれ海を海  
国兵談々忠  
誠不して歎  
称まべき昏  
あり然まど  
も其中軍中  
よてハ太刀  
を玉の如く  
大切取扱

神武天皇の御紀ふ。昔 伊弉諾尊。目此國との玉ひし中  
ふ。細文千足國と何て。又物のときを。國此名ふさへ負  
し免ぬひしおゆ。今我身去ら。常ハ太刀を帯ひ居て。事何  
らん時を。敵を兩断まべと。のおへふぐら著たふ衣也。袖  
大きく。裾の開きがとくて。袴をさへふ。著るが常ふれば。  
進も退も。心ふ任せぬは。ふをびといふは。そもく  
天照皇大御神を。女神ふ在せど。時ふ臨みては。雄健びふ  
健びて。劔をも持たしぬひき。  
天皇を。もととめ朝廷ふ。仕ふる臣達を始也。下の下とい  
へど。

ふ物よあら  
び。只敵を敲  
きひしく。鉄  
棒と心得べ  
しや。書とる  
ハ取べあら  
び。

天皇の命を傳へ。御稜威をもいゑきて。天の下を治む  
る限也。人々。此太刀を。おびて居るよと。我國自然此國  
風ふ。袖大きく。襷長き衣也。自然ふあらび。漢國ふあ  
らへるよて。太刀を我太刀。衣ハ他の衣あるをのれ也。  
一 應神天皇此御世とめ。我國よて漢衣を作て。著そめふ  
也と見ゆ。のく此御代よ也。此衣を作らし免たる也。彼の  
國風此。いゑく。飾まは。姿の好まし。我武き姿を。おのく  
ふ賤しとして。遂ふ世也。皆漢ざは此服と成て。百とせ千  
歳をぬるま。に。後々此世よては。其漢ざはを。我の神代  
とめの服とおもへは。あゆ。



一 天川神の御代をゆ。傳へ來ぬ依衣を止て。漢衣とあゆむ  
依衣。其始を正我國中悉改あるふを阿らび。先づ貴人ぞ  
始あるべし。夫も家主を始よて他へ行ふを。漢衣を  
著まども。うちくを著ふれし儘ふ多阿正しあるべし。  
然るをやうく作正添へ扱。終り皆がらのをまは成  
ばし。かく次々家人此。残りなきまで改しは。其間一家此  
中とても。年月をへとは事あるを。又貴人ふ次てハ。富  
る人の改しからん。夫をゆ貧しき下下此。國々みま  
及びした。ゆくらの年月を経たるふの阿らん。知かど死  
事ふ正。萬葉集をく考まむ。我と彼との衣。うち交ゆ。こ

とふ漢衣のかと多のらび見ゆ。百代衣を八人奉り  
一 衣をいひ。禪カといひし。上代の衣服を。古をゆ委しくせき  
たる書を見ぬ。荷田の大人。岡部此大人。本居の大人。平田  
の大人。此四大先生さへ。説ぬをば正し字。今我學あき身  
ふして。纔ふ此三書をゆ。其證を見出て。始り考あたるを。  
我意ともおもをまび。言イハまくもかしあまきど。  
神武天皇の御衣服をケレちらふ正。  
天照皇大御神乃御衣服の。凡ふも知られ奉しは。いとく  
奇しとも。悦しともいふべきやうふし。こまゆのぬる故  
ぞと。阿は多くびのへはひおもひ見るふ。今や



朝廷の御稜威<sup>イヅ</sup>古へ承<sup>ニ</sup>のへらせぬひ。大御政新ふ。千歳此  
舊習をも改ぬふ。此御時々當<sup>ニ</sup>て。我年頃おもひ渡<sup>レ</sup>し。  
此考此今成就<sup>レ</sup>るも。

皇神達<sup>ニ</sup>。常ふかく雄々しき御姿ぞと。神の示しぬへ依  
ふや。有らんとさへおもハるゝあ<sup>ニ</sup>。身かざりふ過<sup>キ</sup>まバ。  
夫は隨てあ<sup>ク</sup>。詠重く。物毎ふをのゆる<sup>レ</sup>。身のげ<sup>ニ</sup>あ<sup>ク</sup>。  
れぞ。ま<sup>ニ</sup>隨てこ<sup>ク</sup>。ろの詠<sup>ク</sup>。もの毎<sup>ニ</sup>。姿みやうれ<sup>キ</sup>ま<sup>ク</sup>。  
神の御代より。人此世承傳へぬひし衣服<sup>ニ</sup>。かくも有<sup>レ</sup>べ  
し。我もと<sup>ニ</sup>。加<sup>キ</sup>ま<sup>ク</sup>。取<sup>ル</sup>。あ<sup>レ</sup>を合せて考<sup>ル</sup>。多<sup>ク</sup>も身  
ふ餘<sup>キ</sup>。協業<sup>ス</sup>。あ<sup>レ</sup>ぞ。中<sup>ニ</sup>。ふ<sup>ニ</sup>。誤<sup>ル</sup>。も有<sup>レ</sup>。べ<sup>キ</sup>。ま<sup>バ</sup>。人<sup>ニ</sup>。あ<sup>ク</sup>。わ<sup>ル</sup>。し

ぬひて<sup>ク</sup>。偕此上代の衣<sup>ニ</sup>。紐有<sup>リ</sup>。て左衽<sup>ニ</sup>。あ<sup>ル</sup>。べ<sup>ク</sup>。その  
上<sup>ニ</sup>。帯<sup>ニ</sup>。を結<sup>ヒ</sup>。釧<sup>ヲ</sup>。をま<sup>キ</sup>。足結<sup>ヲ</sup>。を<sup>シ</sup>。又玉<sup>ヲ</sup>。頸<sup>ニ</sup>。あ<sup>カ</sup>。け。髪<sup>ヲ</sup>。  
右と左と<sup>ニ</sup>。結<sup>ヒ</sup>。て櫛<sup>ヲ</sup>。をさ<sup>シ</sup>。玉<sup>ヲ</sup>。飾<sup>マ</sup>。ゆ<sup>ト</sup>。み<sup>ヨ</sup>。依<sup>テ</sup>。上代  
此さは猶委<sup>シク</sup>。尋<sup>ズ</sup>。茲<sup>レ</sup>。び<sup>テ</sup>。を<sup>ア</sup>。ら<sup>ザ</sup>。らん<sup>モ</sup>。れ<sup>ゾ</sup>。

袖袂

和名抄 袖<sup>ハ</sup>。所以受<sup>テ</sup>。手<sup>也</sup>。字鏡 袂<sup>ハ</sup>。袖<sup>ノ</sup>。末<sup>也</sup>。と有<sup>テ</sup>。古も今も變  
る事<sup>ナ</sup>。き<sup>ク</sup>。如<sup>ク</sup>。あ<sup>キ</sup>。ま<sup>ド</sup>。此文字<sup>ニ</sup>。

應神天皇々<sup>レ</sup>。後此<sup>ノ</sup>。もの<sup>ヲ</sup>。あ<sup>キ</sup>。ま<sup>バ</sup>。證<sup>ト</sup>。し<sup>テ</sup>。の<sup>ト</sup>。し。今<sup>ニ</sup>。其前  
れ事<sup>ヲ</sup>。をい<sup>フ</sup>。あ<sup>キ</sup>。ま<sup>ド</sup>。あり。上代<sup>ニ</sup>。釧<sup>ヲ</sup>。有<sup>リ</sup>。足<sup>ヲ</sup>。結<sup>ヒ</sup>。今<sup>ニ</sup>。此服  
ふて<sup>ク</sup>。此釧<sup>ヲ</sup>。を纏<sup>フ</sup>。べき<sup>ヤ</sup>。う<sup>ア</sup>。く。足結<sup>ヲ</sup>。を<sup>ウ</sup>。ら<sup>ザ</sup>。き<sup>ヤ</sup>。う<sup>ア</sup>。







を。又ハタ袖おど有て。袖此端つ方を云。魚の鱗と。又俗言ふ物此邊側を。ハタと云も。同言あり。タギは。多ぐり揚るを云されバ。此を左右此手を張。袖を多ぐり揚て。此水鳥の胸みる如くふして。吾著装多衣字。好しや惡しやと見るをいふ。コレハフサハズ。此を不宣あり。と云。長敦云。今此人あらむ。衣の色此与し。何しを見ん。ふ腕を延して。袖の廣らある所を見るべき。神の御代は。筒袖ありし。のらに。胸此外ある。廣らある所此あきむへ。かく胸を見ぬ。ひし。扱冠辞ふ。袖をタグ考ル事といひ。記傳ふは。左右此手を張。袖此ハタを。タグリ

揚て。水鳥の胸見る如くよして。とあるを。前より此言ひ下しをおもへむ。水鳥の兩翼を張て。首字延て胸を見。如くある事と聞えとゆ。かく説きとゆ。何まゆ。水鳥此真似ふ。過了。神の御業とも思われざる。あ。此御歌。御衣此色を見ぬ。えん。沖つ鳥胸見る時といふ。御袖をタグリ揚るといふ。御袖此あるべくもあらば。此タギとあるは。い。ふも。タグルといふ事と聞ゆるも。此も。兩大人とも。御袖の事とおも。成べし。我今其考ハ。胸こる時。い。ふ。こ。ま。を。ふ。さ



をびといふ。御句此間小。他の言葉此入るべきとしあは  
まば。若やハタ、キモといふを。今の世ふ。イヤヤクタイ  
ナあどいふ言葉よてもほらむのし。あわ考ふべきあり。  
萬五遠等咩良河遠等咩佐備周等可羅多麻乎多母等爾  
長歌 麻可志。此頃を我國の玉此みあらば。唐國とゆ來まる玉  
をも用ゐしふて。其玉をタモトふ纏とは。玉のつきあは  
釧を肱此上よ纏をいふあり。都て足玉手玉と計正いひ  
ても。釧ふ著け足結ふ著し玉をいふ成る事。仁徳紀。女鳥  
此皇女の條此。紀と記をを見合てとく知らまふれば。あ  
こも手本タモトよ釧字纏とるれり。筒袖あまむこそ。手本タモトよま

くべらまど。大袖の端今タモトといふ所あらんふをまくべきや  
うあり。此歌を。只一首あら。肱の上をタモトといひし  
證よて。筒袖あ正し事をも思ひ定むべき歌あり。實ふ此  
一首傳正とるいと尊し。萬十和我袖波多毛登等保里氏。  
奴禮奴等母故非和須禮我比等良受波由可自。忘貝を取  
らんとして。手先の潮ふ濡て。筒袖の先をり肱の上。手本タモト  
でぬま通るとも取らばをのじ。ととめるあり。此歌ソ  
デとは。手先此方。タモトとは手本タモトあり。や見ざまを聞え  
ぬ歌あり。冠辞衣手常陸國ふ。竝立筑波乃山乎。こは在滿  
のいへ。ゆいごととほぐけあらんと。今考るふ。古の袖を。は



むのせむくて。丈けの長々まバ。手拱タムダクふも。事をあまふも。袂タテ此とどレ正マをとどる故ふ。ひど多のふべし。依て右レ此レ説をとしとり。を何正マ。長敦按ふ。在満を。今レ世ふいふ。行キの長きよて。手業中は時をとど正マ上るゆゑふひあれつく事と考へありと見ゆ。眞ま當まゆ。縣居の翁を。今いふ振袖の如く。堅ふ長しをおもれと正。堅ふ長くてを。ひどを付き難くとしやつくとも。言ひ立る程此事もあるまじ。同書衣手此たあのみ山。此を二レ此レ意何ゆ。一つふを。衣手此た長きてふ意ふて。田上ふいひのけとるう。云く。今一を。衣手の疊をるてふ意ふ。言ひか々しふや。前ふひどと

も。たとるとも。つづけし如く。古の狭く長き袖を。常ふたぐるべらまむ。疊をるひどの有べきあゆ。と何正マこまも振袖の如く長しと考られとるを誤れ正マいのふ上代あれをとて。たく正マ上る布ど此レ振袖を。ままら男の著べきやうハれし。彼手首をゆ。先へ細く出とる袖あらんふを。堅と横との違ひ迄ふて。手長と考らまたるも。疊をると考らまとるも。共よとくのあへ正。萬十白細布之袖折反恋者香妹之容儀之夢二四三湯流。此袖折反はいふを。指の先へ出る所を内へ折反せむ。人を抱く形とあまば。夢ふ見るといふ。諺の有しあらん。衣出反はと此みい



ふ哥も多く何正同じ事あるべし。同三白細之袖指可倍氏。  
靡寝吾黑髮乃眞白髮爾。此袖差のへてとハ。細長き衣出  
故あり。大袖としてを。差のへは詞のふひかとし。同十不  
相爾。夕ト乎問常幣爾置爾吾衣手者又曾可續。萬葉略解  
以下略解と著と依衣の袖を。又も續べきもれぞとて。解て幣と衣  
系を云正。と何正。ゆふけとハ。夕小出る迂うらあり。幣を  
ハ。何ふても神へ奉るもれをいふ。扱此幣小置とる。衣手  
を。手首をゆ先を解て幣とせし成べし。こまを今此世の  
袖ふて。肩よ正先を解放ちた正としてを。暫時も其衣著  
らるべのらば。若此事をふさんふを。今著て居る衣あら

で。櫃ふどへ納免置し。衣の袖を解て奉るとせんう。扱を  
いふしへは様ふ何らば。必手首をゆ先つ方を解て奉正  
し成べし。猶衣替の條と見合べし。古今集は。手向ふを。つ  
づ正は袖差きるべきふ。せとみした。只古言を取てよ免  
ふ迄と。思ハまと正。同四白妙乃袖解更而還來武月日乎數  
而往而來猿尾。略解宣長云。袖解のへてハ。袖を解き放して。  
男女互ふ。形見として。行也といへ正。前ふも云し如く。櫃  
ふ納免置と依衣の袖を解て。互ふ形見としてを。其情薄  
し。こまも手首をゆ先は。衣出を解とるよ。其片ソテあ  
きを。互ふ著て居るふ依べし。同五之路多倍乃阿我許呂



毛氏乎登里母知氏伊波敝和我勢古多太爾安布未低爾  
此取持て齋へとハ其片袖を手お持て捧げけり逢しめ  
ぬへと祈を云冠辭考ゆふ疊て手向の山此を木綿を疊て  
捧多手向まむ志のつぐけとめ」とありこれと同じ今  
互お著て居る衣の片衣出を解て取のえし其片衣出あ  
き衣をおのまゝ著て居らんよはおのづのら情も通  
ひてことお其片ソデを取持て神を祈あバ神も何をま  
とやおおひらんかゝておそ古人れさほふを有れ同  
一白妙之袖者間結奴我妹子我家當乎不止振四二ま  
ふ和名抄お和名抄紕マヨフ一云ヨル繒欲壞也とあり筒袖の出

とる先を度々振ておバ終ふ紕いぬべし大袖を振らん  
お腕を延して横おふる。又を垂とるあと正を握み  
て振るういひまよもせと幾度ふゆともまとも程の事  
をあらじ筒袖の手首とめ先へ出とる所ハ度々振らば  
とてもまとも安のるべき所おれバ常お繼替る事お無  
きおをあらじされむまゝ其片ソデおきほく著た  
らんとても見苦しき堪難き程の事おあらじ。

火此御神の荒ぶる時いつも我家へ筒袖の指とめ  
少し差出あゆ衣著て来る人あり諸お物おぬりご  
免へ運ぶお其ソデの儘持の故風さゆる折とても



いつ迄も手の先あぐえ姿。又指糸て持と祔むおらぬ物有る時。袖を多ぐ正揚げ。又折返しおどして。手首を出ひおり。寒夜の往來も袖寒からでとと云き。

袖とゐる歌。萬葉集中のまとゐまど。大袖ふや。筒袖ふや。分のべきやふれし。さまど其うちを。委しく考まて。人字恋ひ歎く時。振袖と筒袖ののとおり。珍しげお聞ゆ。大袖の方あり。筒袖は指とゆ先糸。少し出あるを。おち肱をかぐむまバ。ソデ多く出るも此おまむ。夫心おるまりて。のれしき時。振袖事。上代の風俗と見えとゆ。實

ふ。指とゆ先糸差出ある。ソデをふらん糸を。かき亂て歎くさは成べし。萬一ハニ石見乃也。高角山之木際。從我振袖乎。妹見都良武香。同卷妻の身まのゆし時の歌。道行人獨谷似之。不去者為便乎。無見妹之名。喚而袖曾振鶴。同九立走叫袖振。反側足受利四管頓情消奴。此外袖を振て歎く歌多し。又大袖おらんと思える。は。萬一茜草指武良前野。逝標野行野守者不見君之袖布流。とゐるは。

天武天皇の御事糸て。先帝

天智天皇とゆ。殊に唐様を好みぬひし。のち。此御時筒袖おらで。大きおる御袖を振せらまて。御狩野字行のせぬ



ふ。御粧ひを野守を見奉らばやと。野守ふとせて。御袖は  
大きなるを。愛奉るふ也。誰もく。大袖あらんふをかく  
詠べきやうれし。萬一矮女乃袖吹反明日風京平遠見無用  
爾布久の去のふ都何正し時を。宮女達の大きなる袖を。  
吹返しおどして。風も吹のひ有し。今を都は。藤原よ遷  
されとまバ。明日香ハ。田舎と成て。宮女達も居らば。いと  
づらぬ。風はみ吹といふあり。此頃田舎人を。筒袖あるべ  
し。古今集也。春日野の。若菜つみよや。白妙は。袖ふゆをへ  
て。人の行らむ。とと絶るも。大袖を愛る心。と絶るれ也。  
萬十袖垂而伊射吾苑爾鸞乃木傳令落梅花見爾のく袖

多まてと。おとせるも。未我國大きなる。袖が珍らしと。其  
袖を垂して。花をせ見ゆ。殊に悦しの也。しと見えとゆ。  
然まども。大きなる袖を垂して。其身は自在ならぬをも  
おもてで。寛ふ依物とせしハ。我國のま去ら男心を。遠く  
成行し。始れるべし。同十白妙之手本寛久人之宿味宿者  
不寝哉恋將渡也のといふ發語。たもとく置たるを  
ゆ。此頃筒袖を貧とし。大袖をゆとらふ也。したる事。此  
歌をてとく知らゆ。同十直獨宿杼宿不得而白細袖乎笠  
爾著沾乍曾來。此沾つといへまバ。小雨降しあるべし。  
同十唐衣君ふらち著せ。見まくふ也。恋ぞとらえし。雨の



ふる日を」といふ歌也。女唐衣をぬひて。男の來るを待ち  
也。此直獨の歌也。女唐衣をぬひて。男れもとふ贈りとする  
の。其男。其衣を著て。始て來て悦ひとめる歌と聞え多也。  
此歌袖を笠不著といふが。主ふる。雨を降とれぞ。此大き  
ふる袖有し故來まじやいふあり。かく大袖を珍らしと  
云。依事知るはし。同十ヲキモコガソデヲクミテ。マノ。ウラノ。コ。ス。ゲ  
乃笠乎不著而來二來有。此歌也。妹の也行ふ。今雨降出ぬ  
べき空あらの。妹の袖の大きふるを。頼おもひて。笠も著  
びして。來しと戯まを。終るれり。世に人皆大袖あらん  
を。このとをむべうらび。此女常ふるさへ。豊ふみゆる唐衣

を。著て居多也と見え。夫を愛する歌也。萬アキタテバ。モ。ミ。ダ。バ  
挿頭敷妙之袖携カサレ。シキタヘノ。ソデタカサリこの携とハ手携テタサリとも云て。今世ハ手  
と手を引る事ふるまじ。上代ハ長き筒袖のまじ。手首出  
さぬ時もある也。其儘手を引まじふるべし。さるよをめ  
て。袖携といひしと見えと也。袖の字ハ心をゆけて見る  
べし。  
一 上代ハ筒袖ふるまじ。今世ハ袂といふ所。袖の垂たをあげま  
じ。其名もれし。さるを大袖の衣。著る世と成て。其垂ふる  
端の名ふる。あらぬ也。其所を暫く。袖も袂とも。又ふる  
もとれくだめれと云しふる。實ふる其垂ふる端を。手首の



蜻川親胤君  
云袖ハ筒袖  
よて指をり  
先へ差出と

方々ゆ唱ふる時をソデ。肩は方々ゆ唱ふる時を。タモト。  
おまむ。二方ふ唱へしも。尤おゆけ。かくさほぐ。云し  
ぐ。終ふタモトといふ事。云ひ定めとる成べし。萬十可  
是乃等能登抱吉和伎母賀吉西斯伎奴多母登乃久太利。  
麻欲比伎爾家利。略とだゆを行と同じとて。袂の上をゆ  
下までまをひととてといふあるべし。と何。九萬樂波之平  
山風之海吹者釣爲海人之袂變所見。この袂は字をソデ  
と訓さまむ。調とては。然ハ袖とも袂とも。云し事知ら  
れあり。古秋の野純。草の袂。花まき。穗ふ出たまね。  
袖を見ゆらん。此ハ筒袖は歌あぐら。袖も袂も同じもは

る所を振し  
事。此説の如  
くふれど。其  
袖振る事。其  
万葉集中。み  
見えて。是の  
ま古き。函あ  
ども。我見及  
びて疑ふ。々  
まど。こハ既  
く形容を飾  
れる。よて。真  
小上古を。手  
首の何と。正  
まで成べし。

と志とれむ。いと解き。のとし。古今ふも。此歌袖と袂を。あ  
お詞をのへとる。此みふて。同じ意ありと何。先つ筒袖  
は。手首をゆ先へ出とる。袖を振るを思ひやめて。薄ハ。草  
の中ふて。袖ふて有ゆる。穗ふ出て風ふ吹る。さほむ。  
人を招く袖とみゆらむといふ歌あり。薄は穗の風ふ靡  
きて。片向ふ動くさほの。正しく筒袖は。先ふて人を招く  
ふ似とてといふあり。若こそ大袖は歌と見なハ。薄の穗  
は靡くふかふ。前ハ樂波の歌。袖をいふ。袂は字  
を書き。此歌ハ。袖の事を袂とも袖とも。二方ふ言し。お。正  
かくさま。あるは。未ど大袖の端を。タモトと言ひ定



絶ざりし。前ふまむあるはし。

釧

和名 服玩部。釧内典云。在指上者。名之曰環。在臂上者爲  
釧。比知と何也。古へクシロともいへど。多く手纏といへ  
也。ヒヂマキ也も云し成べし。此釧の字。金偏よて。環也對  
へいふを思へむ。漢國よて也。臂比上へ肌ふまむ。金の輪  
と見えたり。我國ふて釧といひ。手纏といふ也。垂仁記 腐玉  
緒三重纏手とも何也。其緒即ち手纏ふて。玉或は鈴あ  
ぢ。残著るも此ふまむ。甚く違へり。さまど臂よ纏く所ハ  
同じりまむ。釧の字を何てたる成べし。ゆゑく同じ物

よ何らば。腕の肌へ金比輪をまむ也。夷狄比風あり。衣の  
上小玉鈴を著る緒を纏く也。我上代のさは何也。かく  
る味也。古學よ少し心入るらん人。能く知らるはし。扱  
手纏は。玉も鈴も著しものふまむ。衣比上ふまきし事。論  
ふし。されむ上代筒袖比時。纏多れど。後大袖比衣とか  
也。てを。用ふきものと成しふるはし。記 伊邪那岐大神。禊  
の段。小次於投棄。龍御手之手纏。所成神名。奥疎神云。紀  
素戔嗚尊。乞取天照大神。髻鬘及腕所纏。八坂瓊之五百箇  
御統濯於天真名井。のく伊佐那岐大神の方也。楔しぬふ  
時ふまむ。玉の付と手纏を。其儘投棄ぬひしふれど。素



多鳴尊の方カ。八坂瓊ニとけみハ何レ也ト。手マきトハカきタ思フルニ。此御時は。素多鳴尊ハ。手纏トを乞ぬレ。其手纏ル付トるニ。御統瓊ノのみを乞ぬヒしトみえタりコまラにてモ。腕ノ纏ク瓊トを手纏ニ著タる事粗ク知ラる事也ト。まド。去レて手小マく玉といヒ。又足玉手玉カといフ也ト。釧ニ付ケ。足結ニ付トる玉を依事次ふる仁德記小テとク知ラる事也ト。紀天孫又問曰。其於秀起浪穗之上起八尋殿而手玉玲瓏織紅之少女者。是誰之子女耶五。足玉母手球毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫將堪可聞記。亦腐玉緒三重纏手。且以酒腐御衣云。握其御手玉緒且絶。此

三重ル纏多る也。手纏マて必三重小も限リまシ。一重も二重も有ルべシ。足結ノ所ト見合ベシ記。傳釧の鈴也。一重有テ。其鈴ヲ除テて別ル體也カきモけレ也ト云フ。説ヲ取ル也トし此三重小纏トる也。珠數ノ如ク玉ヲ貫テハ音ハ去まシ々レ也ト。三重ノ纏多る外れ糸以テ玉ヲ著シからん仁德記。將軍山部大楯連取其女鳥王所纏御手之玉釧而與己妻此時之後將爲豐樂之時氏々女等皆朝參爾大楯連之妻以其王之玉釧纏于己手而參赴於是大后石之日賣命自取大御酒栢賜諸氏々之女等爾大后見知其玉釧不賜御酒栢乃引退同。皇后奏言嶋鳥皇女寔當重罪。



然其殺之日不欲露皇女身乃因勅雄鯽等莫取皇女所賚  
之足玉手玉雄鯽等云々進及于伊勢蔣代野而殺之時雄  
鯽等探皇女之玉自裳中得之云々復命皇后令問雄鯽等  
曰見皇女之玉乎對曰不見也是歲當新嘗之月以宴會日  
賜酒於内外命婦等於是近江山君稚守山妻與采女磐坂  
媛二女之手有纏良珠皇女見其珠既似鷓鴣皇女珠則疑  
之命有司問其玉所得之由此裳中とゆこれを得ると何  
ゆを漢文の趣字ふさんとてのと書ましふや又あくと  
足玉此事ふて女もあくと足玉手玉と何る此みよ何ら  
以萬足玉母手珠毛由良爾織旗乎ハタ也モ何まむ例のひど

あき禪を著て足結をし其上ふ裳を腰ふ装ふ事あまむ  
其裳中とゆ得るといへるまやのと記此方まハ御手ふ  
纏く所の玉釧を何ゆを紀此方ふを賚る所の足玉手玉  
と何まむあくと足玉手玉といふは釧ま付き足結ま付  
とる玉ある事此條ふて明ふ知られた也萬秋赤葉眞  
割持小鈴文由良爾手弱女爾吾者有友引攀而岑文十遠  
仁ニ抹手折ヲこ此纏き持ある小鈴といふも釧ふ著とる鈴  
あ也

仁德紀上野君田道蝦夷と戦て死せしよ時有從者  
取得田道之手纏與其妻乃抱手纏而縊死萬三マ大夫



乃<sup>ノ</sup>手<sup>タ</sup>結<sup>キ</sup>我<sup>ガ</sup>浦<sup>ウラ</sup>こま等<sup>ト</sup>古<sup>コ</sup>子<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>一<sup>ツ</sup>も<sup>モ</sup>此<sup>コ</sup>説<sup>セ</sup>き<sup>キ</sup>これ<sup>レ</sup>ど<sup>ト</sup>こ  
を<sup>ヲ</sup>軍<sup>クニ</sup>服<sup>フク</sup>お<sup>レ</sup>バ<sup>バ</sup>手<sup>テ</sup>纏<sup>マ</sup>とい<sup>ハ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>手<sup>テ</sup>結<sup>キ</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>老<sup>ロウ</sup>神<sup>カミ</sup>代<sup>ト</sup>と  
り<sup>リ</sup>傳<sup>デン</sup>へ<sup>テ</sup>し<sup>シ</sup>手<sup>テ</sup>纏<sup>マ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>何<sup>ナニ</sup>ら<sup>ラ</sup>で<sup>デ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>抄<sup>セウ</sup>射<sup>セツ</sup>藝<sup>ギ</sup>具<sup>ク</sup>よ<sup>ヨ</sup>鞞<sup>クニ</sup>多<sup>タ</sup>末<sup>マツ</sup>一<sup>ツ</sup>  
名<sup>ナ</sup>小<sup>コ</sup>手<sup>テ</sup>也<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>何<sup>ナニ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>此<sup>コ</sup>説<sup>セ</sup>き<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>脛<sup>シヤク</sup>巾<sup>キナ</sup>を<sup>ヲ</sup>足<sup>ソク</sup>結<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>書<sup>キ</sup>  
の<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>

襷

今<sup>イマ</sup>此<sup>コノ</sup>世<sup>セ</sup>よ<sup>ヨ</sup>襷<sup>タスキ</sup>を<sup>ヲ</sup>挂<sup>ケ</sup>け<sup>ケ</sup>袖<sup>スエ</sup>を<sup>ヲ</sup>揚<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>る<sup>ル</sup>姿<sup>サマ</sup>を<sup>ヲ</sup>いと<sup>ト</sup>賤<sup>セ</sup>しく<sup>ク</sup>貴<sup>キ</sup>人<sup>ニ</sup>の  
前<sup>マ</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>も<sup>モ</sup>ち<sup>チ</sup>ら<sup>ラ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>常<sup>ジョウ</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>前<sup>マ</sup>ふ<sup>フ</sup>も<sup>モ</sup>出<sup>デ</sup>べ<sup>シ</sup>き<sup>キ</sup>姿<sup>サマ</sup>ふ<sup>フ</sup>あ<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば  
古<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>て<sup>テ</sup>も<sup>モ</sup>同<sup>ドウ</sup>し<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>る<sup>ル</sup>姿<sup>サマ</sup>ふ<sup>フ</sup>早<sup>サイ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>神<sup>カミ</sup>を<sup>ヲ</sup>祈<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>申<sup>マウ</sup>と<sup>ト</sup>て<sup>テ</sup>  
襷<sup>タスキ</sup>を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ラ</sup>ん<sup>ン</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>し<sup>シ</sup>そ<sup>ソ</sup>ぐ<sup>グ</sup>上<sup>ウ</sup>ふ<sup>フ</sup>上<sup>ウ</sup>代<sup>ジョウ</sup>筒<sup>ツツ</sup>袖<sup>スエ</sup>あ

らん<sup>ン</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>襷<sup>タスキ</sup>は<sup>ハ</sup>用<sup>ヨウ</sup>あ<sup>ア</sup>き<sup>キ</sup>も<sup>モ</sup>此<sup>コノ</sup>成<sup>セイ</sup>べ<sup>シ</sup>今<sup>イマ</sup>按<sup>ア</sup>ふ<sup>フ</sup>タ<sup>タ</sup>ス<sup>ス</sup>キ<sup>キ</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
を<sup>ヲ</sup>手<sup>テ</sup>助<sup>タス</sup>よ<sup>ヨ</sup>て<sup>テ</sup>手<sup>テ</sup>力<sup>リキ</sup>を<sup>ヲ</sup>助<sup>タス</sup>くる<sup>ル</sup>もの<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>始<sup>ハジ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>袖<sup>スエ</sup>を<sup>ヲ</sup>搔<sup>カキ</sup>擧<sup>アゲ</sup>  
る<sup>ル</sup>物<sup>モノ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>衣<sup>イ</sup>服<sup>フク</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>名<sup>ナ</sup>付<sup>ツ</sup>べ<sup>シ</sup>き<sup>キ</sup>を<sup>ヲ</sup>此<sup>コノ</sup>ぞ<sup>ゾ</sup>タ<sup>タ</sup>ス<sup>ス</sup>キ<sup>キ</sup>を<sup>ヲ</sup>手<sup>テ</sup>  
力<sup>リキ</sup>を<sup>ヲ</sup>助<sup>タス</sup>くる<sup>ル</sup>帶<sup>オビ</sup>よ<sup>ヨ</sup>て<sup>テ</sup>其<sup>ソノ</sup>字<sup>ジ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>記<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>手<sup>テ</sup>次<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>書<sup>キ</sup>  
紀<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>手<sup>テ</sup>纏<sup>マ</sup>と<sup>ト</sup>何<sup>ナニ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>文<sup>モン</sup>字<sup>ジ</sup>を<sup>ヲ</sup>書<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>本<sup>ホン</sup>居<sup>ク</sup>大<sup>ダイ</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>説<sup>セツ</sup>  
次<sup>ジ</sup>ふ<sup>フ</sup>見<sup>ミ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>後<sup>ノチ</sup>ふ<sup>フ</sup>大<sup>ダイ</sup>袖<sup>スエ</sup>に<sup>ニ</sup>衣<sup>イ</sup>著<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>世<sup>セ</sup>と<sup>ト</sup>成<sup>セイ</sup>て<sup>テ</sup>其<sup>ソノ</sup>袖<sup>スエ</sup>を<sup>ヲ</sup>擧<sup>アゲ</sup>る<sup>ル</sup>帶<sup>オビ</sup>も<sup>モ</sup>  
今<sup>イマ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>肩<sup>カミ</sup>よ<sup>ヨ</sup>り<sup>リ</sup>挂<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>同<sup>ドウ</sup>じ<sup>ジ</sup>事<sup>ジ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>夫<sup>ソノ</sup>を<sup>ヲ</sup>タ<sup>タ</sup>ス<sup>ス</sup>キ<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>呼<sup>コ</sup>び<sup>ビ</sup>  
し<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>元<sup>ゲン</sup>の<sup>ノ</sup>手<sup>テ</sup>助<sup>タス</sup>は<sup>ハ</sup>紛<sup>マギ</sup>ま<sup>マ</sup>果<sup>クワ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>其<sup>ソノ</sup>手<sup>テ</sup>助<sup>タス</sup>の<sup>ノ</sup>起<sup>キ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ハ<sup>ハ</sup>天<sup>テン</sup>  
上<sup>ウ</sup>ふ<sup>フ</sup>て<sup>テ</sup>正<sup>テイ</sup>しく<sup>ク</sup>生<sup>ナマ</sup>る<sup>ル</sup>神<sup>カミ</sup>達<sup>ダツ</sup>同<sup>ドウ</sup>士<sup>シ</sup>尊<sup>ソウ</sup>き<sup>キ</sup>神<sup>カミ</sup>へ<sup>ヘ</sup>幣<sup>ヒ</sup>奉<sup>ホウ</sup>ら<sup>ラ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>時<sup>トキ</sup>用<sup>ヨウ</sup>  
ぬ<sup>ヌ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>し<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>起<sup>キ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>て<sup>テ</sup>其<sup>ソノ</sup>儘<sup>シマ</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>世<sup>セ</sup>ふ<sup>フ</sup>傳<sup>デン</sup>へ<sup>ヘ</sup>來<sup>キ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>る<sup>ル</sup>あ<sup>ア</sup>れ<sup>レ</sup>バ<sup>バ</sup>空<sup>カラ</sup>き



佛は物供とて其意い多く異ふて其神の心よく納受ぬ  
ふやうふ幣奉るは加<sub>レ</sub>てそ免<sub>レ</sub>あら<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>忌<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>しむ事を  
いふまでもあ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>手助<sub>ヲ</sub>を挂<sub>テ</sub>手力を助け其神の御手  
取受ぬ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>まで<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ゆ迄も捧居る<sub>レ</sub>天上と<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>此例とぞ  
思<sub>ハ</sub>ゆる<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>べて上古<sub>ノ</sub>人<sub>ト</sub>心入<sub>テ</sub>深<sub>ク</sub>て此幣<sub>ヲ</sub>限<sub>ラ</sub>げ  
人<sub>ヲ</sub>進<sub>ル</sub>もの<sub>ト</sub>何<sub>レ</sub>ふ<sub>テ</sub>も其人<sub>ノ</sub>取<sub>レ</sub>て受<sub>ル</sub>迄<sub>ト</sub>長<sub>ク</sub>捧  
居<sub>シ</sub>て捧持<sub>レ</sub>此條<sub>ヲ</sub>見る<sub>レ</sub>べし此幣取持<sub>ト</sub>免<sub>ノ</sub>手助<sub>ヲ</sub>あ<sub>ル</sub>  
ま<sub>ニ</sub>早く<sub>ト</sub>め<sub>レ</sub>崩<sub>テ</sub>幣取持<sub>ぬ</sub>時<sub>モ</sub>神を祈<sub>ふ</sub>は<sub>タ</sub>スキ挂<sub>は</sub>  
あ<sub>ら</sub>ひ<sub>ト</sub>を<sub>あ</sub>て<sub>し</sub>ぬ<sub>レ</sub>又<sub>ニ</sub>天皇<sub>ハ</sub>御膳奉<sub>ル</sub>時<sub>ニ</sub>挂<sub>ル</sub>も神へ幣奉<sub>ル</sub>と<sub>シ</sub>心<sub>ヲ</sub>へ成

法<sub>シ</sub>。萬葉集 小玉襷を挂<sub>テ</sub>神を祈<sub>ふ</sub>歌數多<sub>ク</sub>あ<sub>ル</sub>也。只此<sub>タ</sub>  
スキ<sub>ル</sub>玉を付<sub>ケ</sub>と<sub>ル</sub>迄<sub>ア</sub>め手纏<sub>ル</sub>玉<sub>ヲ</sub>付<sub>ケ</sub>足結<sub>メ</sub>玉  
を付<sub>ル</sub>と<sub>シ</sub>。記 天宇受賣命<sub>ノ</sub>手次<sub>ニ</sub>繫<sub>テ</sub>天香山<sub>ノ</sub>日影<sub>ヲ</sub>而<sub>テ</sub>爲<sub>ス</sub>  
鬘<sub>ル</sub>天之眞折<sub>而</sub>。記 傳 書紀<sub>ハ</sub>云<sub>フ</sub>手纏<sub>ト</sub>書<sub>テ</sub>此云<sub>フ</sub>多須<sub>積</sub>と  
の<sub>レ</sub>也。繩<sub>ヲ</sub>字<sub>ニ</sub>タスキ<sub>ル</sub>の<sub>レ</sub>と<sub>ラ</sub>げ<sub>ル</sub>字鏡<sub>ハ</sub>繩<sub>ヲ</sub>負<sub>フ</sub>兒帶<sub>也</sub>。長敦云<sub>フ</sub>負<sub>ル</sub>  
兒帶<sub>モ</sub>手<sub>ヲ</sub>助<sub>ク</sub>る<sub>レ</sub>あ<sub>ま</sub>ま<sub>バ</sub>其<sub>レ</sub>襷<sub>ヲ</sub>袖<sub>ヲ</sub>を舉<sub>グ</sub>る<sub>レ</sub>由<sub>テ</sub>倭<sub>ノ</sub>字<sub>ニ</sub>成<sub>ス</sub>  
べし云<sub>フ</sub>か<sub>ク</sub>て後世<sub>マ</sub>で神事<sub>ハ</sub>全<sub>ク</sub>此段<sub>ノ</sub>故事<sub>ヲ</sub>因<sub>テ</sub>。  
萬<sub>ヲ</sub>用<sub>ラ</sub>る<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>事<sub>ハ</sub>也。長敦<sub>ハ</sub>按<sub>ス</sub>此<sub>ノ</sub>時<sub>ニ</sub>宇受賣命<sub>ハ</sub>手次<sub>ニ</sub>挂<sub>テ</sub>  
ぬ<sub>レ</sub>ひ<sub>と</sub>い<sub>と</sub>づ<sub>ら</sub>ぬ<sub>レ</sub>あ<sub>ら</sub>じ<sub>ニ</sub>俳優<sub>ハ</sub>あ<sub>ま</sub>ま<sub>バ</sub>定<sub>マ</sub>ま<sub>ス</sub>る<sub>レ</sub>事<sub>ヲ</sub>  
有<sub>マ</sub>じ<sub>レ</sub>れ<sub>ど</sub>。記 天宇受賣者<sub>ハ</sub>爲<sub>ス</sub>樂<sub>ハ</sub>八百<sub>方</sub>神<sub>ノ</sub>諸<sub>ハ</sub>咲<sub>ク</sub>天宇受



古史傳ふが  
と称祈啓  
し給へるハ  
云、外は貴  
神御坐は  
依て其神は  
白し給へる  
状あり。

賣。白言益汝命而貴神坐故喜咲樂と云。此貴神いまは  
心よて其神へ幣奉るさほは俳優ふてタスキを挂しふ  
も有べし。記科玉祖命。令作八尺勾璫之五百津之御須麻  
流之珠而云々五百津眞賢木矣根許士爾許士而於上枝  
取著八尺勾璫之五百津之御須麻流之玉於中枝取繫八  
尺鏡於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而此種々物者布刀  
玉命布刀御幣登取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白而長  
敦云。神武天皇大喜乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹以  
祭諸神と云。此時も眞坂樹へ種々の物取著あるべし。  
古史傳 景行天皇紀。仲哀天皇紀。おどふ賢木は枝は鏡劔  
採用

玉を著て。天皇命ふ獻まる事は有るを。此段は故事不依  
まる。古の禮義あり。さて中昔まで考。人ふ物を贈る。多  
く本草は枝は著と云しも。師説の如く。此段の榊は枝は  
つけと云。故事を起まる成べし。ミテグラは神は獻る  
もの。人ふ贈る物を。凡てクラといへばと見ゆ。其は古事  
記。千位置戸と云。位を借字あり。云々。ミテは御手は  
て。後小天皇の御手づのら神は獻るぬふものを。御手ク  
ラと云ひ習へは其名を始へ廻して。此段も然云へふ  
成べし。取持を。師云。凡て御幣を取持事。此時は儘は後  
は御世々。まて忌部氏の業あり。玉祖命ハ。太玉の命は



萬二水篋スガカ 志シあぬれ眞マコト 弓ユミ萬十一春ハル さまむ水草スエ 之上ノ上ノ此コノ 水篋スガカも水草スエ も只ただ子コ篋カと 草クサありこれ 言コトを助字トクの

御姊ミイメふまして玉タマを作ツクりぬひしおまむ。こま奉ホウる事コトふ與ヨ へべきよ。然シカも非ヒで太玉タイタマ命ノの掌テまる事コトは。太手タイテ擿ヒ取ト挂ケて と云イハひ。根掘ネウケよ爲ナたる。榊カサネあどを思オモふよ。甚シく力チカラれ入イる事コト よて。女神メカメのもれし難ガタき事コトある故ユふ。御兄ミケイの替カりて。もれ しぬへは成ナべし。長敦チカトク按オふ。 天皇テンノウの御手ミテづのら。神カミよ獻マカりぬふもれを。御手ミテグラとい ひ習ナラへぬふを何ナニらじ。机ツクリへのせて獻マカるもの字ナリ。置オキクラを いひ。手テよ取ト持モて獻マカる物をミテクラといひしよを何ナニら ぬり。ミテといひて。只ただよ手テれ事成ナべし。此コノ大人オホタチの説セツれ如 く。力チカラれ入イる事コトもぬふ挂ケしタスキふて。祈イノり申マカる爲タス

黒川真頼大 人ヒトハみてぐ らも満ミツ座マあ りと。桂林漫 録マンロクよ何ナニを をしと云イハべ しと云イハべ。

キふ何ナニらげらる事コト論ロあるべし。扱オ又マタ類則ルイソク大人オホタチを。此コノ説セツを 見て。神カミふ獻マカるもれ人ヒトふ贈オモりぬふものを。凡ソトてクラといひし ぬを非ヒび。其ソノ獻マカるもの贈オモりぬふ物モノを。必カナラし机ツクリれおれ。何ナニふまきも ぬふ載オモりぬふものを。クラといへば。ミテクラも。 天皇テンノウれ大御手オホミテにぬせて奉ホウらるるよしの名ナありといへ ば。眞マコトふクラといふを。此コノ説セツの如スくあり。さまむ古コノを物モノを 何ナニのらさまぬ。いふを賤セとせしぬや。大祓詞天津金木天津金木乎乎本 打切末打斷ウチキリ氏ウヂ千座置座チザ置足オキタ波志ハシ氏ウヂとぬみ有りて。其 贖物シメモノをいぬぐ。尊ウツクくおもむき。又マタ神樂カミガク手テくらふあら ましもれ字ナリ。皇神ミコトのこてよ取トられてあど。有アる字ナリ思オモへむ



早くとり獻るもの贈るもけをクラとけこも言ひしと  
思えり。あ<sub>上</sub>。神武紀。大物主神を祭る處。使太玉命以弱  
肩被<sub>上</sub>。太手襪而代御手祭此神者。起於此矣。此文大物主  
神を祭るも。太手襪挂るもともふ。此時起まる如くも聞  
ゆまど。さふをあらび。大物主は神を祭る事。こくも起ま  
りやいふとれゆ。扱袖を搔上るまでの手襪<sub>タスキ</sub>あらんふを  
のくおきくしく弱肩。太手襪取挂といふべくも何  
ら安。此文意を熟考する。太玉命といへども。皇御孫尊は  
御手は代り奉りて。神の受ぬふべきやう。幣取持事ハ。  
此上もあき大任あまバ。不肖は身の及ふ所あらぬど。太

きたあき。手力を助け。此一大重事を奉仕といふ事と  
聞えとゆ。只弱肩。太手襪取挂てといふむかゆあるを  
味ふる時。かく深き意は聞ゆる。古文の妙れは系<sub>上</sub>。  
又此文は皇御孫尊は御手は代りてとハあて。御手は  
代りてとあるハ。幣取持の主ある故成る事。古史傳五  
十三段もも見えとるが如し。凡て捧物<sub>上</sub>は依時。タスキ挂  
る事。皇産靈神の御手も。千五百坐御まし。石戸開の前  
の神代も。いと永き事と聞えて。其品こそ知らまぬど。古  
き神達天上へて物捧り獻るふ。襪挂る事の有し成べし。  
されバ其例は宇受賣命もタスキを挂て。尊き神も



の獻るさまは。俳優をや爲ぬらん。又此御時。太玉命幣  
取持おのら。タスキ挂しといふ事也。紀ふも記ふも見え  
ぬ。い加ふといふ。此御時を殊更に思金の神におも  
たしめて。種々の事新に取行ひぬし中ふ。タスキ挂る  
事は常の事よ。思金の神に思ひ設らましよをあらさ  
るも。ゑ。こゝふ言をぬあるべし。さまど此御時太玉命の  
タスキ挂ぬし事ハ。後世まで神事を。全く此段の故事  
お因て。萬を用らるゝ事おめとある如く。神武紀大物主神  
を祭る處。太玉命に弱肩よ。太手襁とめかけてとある  
也。此石戸開の例ある事知るべき也。萬三竹玉乎。間無貫

垂木綿手次可比奈爾懸而此のひあま挂てとある。一首  
傳らば。タスキを腕に懸るものあらんと考へは説も。  
其證あつて人承ひくまじきを。かく腕に挂る事。正しく  
知らるゝ上を。手力を助くるもおめといふ事。いとく  
明あ也。古史傳五十玉串也。懸居大人に説ふ。玉を著たる  
木竹を云ふ。玉串の名ハ。手向串あるべし也。言まつまど  
信のよし。本ハ信よ玉を貫垂らんを。や。後よ玉を著は  
も奉正らん。後よハ終ふ玉串の名にみ存めて。木綿を著と  
る。賢木をしの稱ことゝ爲まるおめ。串とハ根掘ふたたる。  
賢木の大きあるお對て。刺立もし。手よ執持もあるハの



正ふ。少き故よ云るふて。篤<sup>ス</sup>け玉串と。賢木の玉串と。打交  
て齋庭<sup>ユニハ</sup>よ差多て。榊<sup>ハ</sup>け玉串を。後世よ爲<sup>ス</sup>る如く。手ふ執て  
神前ふも進<sup>ス</sup>びむと所思也。其を大御神<sup>ハ</sup>け神事よ。榊ま  
と太玉串を仕奉る状を。内宮儀式年中行事等ふ依て考  
るふ。云く。玉串<sup>ハ</sup>け行事ハ。岩戸開の儀式ふ因る事よて。古  
傳と聞え。此神祭よ集へ<sup>ル</sup>人々<sup>ハ</sup>。各賢木を進<sup>ス</sup>ゆ事<sup>ハ</sup>。岩  
戸開の時集ひ坐<sup>ス</sup>ふ神等<sup>ハ</sup>。賢木を捧持々んこと違ひ<sup>ハ</sup>  
るまじく覺也。と<sup>ハ</sup>正。長敦<sup>ハ</sup>。あや考るふ。此御時兒屋根<sup>ハ</sup>命  
を。太祝詞言ぬき申し。太玉命<sup>ハ</sup>。只そ<sup>ハ</sup>太御幣を<sup>ハ</sup>けみ。取  
持と<sup>ハ</sup>えし如くあまど。さふハ非<sup>レ</sup>也。<sup>紀</sup>中臣連遠祖天兒屋

命。忌部首遠祖。太玉命。掘天香山之五百箇眞坂樹。而上枝  
懸八坂瓊之五百箇御統。中枝懸八咫鏡。下枝懸青和幣白  
和幣。相與致其祈禱。と<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>。兒屋命<sup>ハ</sup>。禱申<sup>ハ</sup>け主ふて。次  
よ太玉命<sup>ハ</sup>も。太御幣取持つ。禱ぬへ<sup>ハ</sup>成べし。あや此二  
柱の神<sup>ハ</sup>。禱申<sup>ハ</sup>け長<sup>ハ</sup>ふして前よ見えし。古史傳の説<sup>ハ</sup>け如  
く。こくよ集ひ坐<sup>ス</sup>えし。神達<sup>ハ</sup>け皆禱ぬハぬ<sup>ハ</sup>。あらざ<sup>レ</sup>正し  
成べし。<sup>延喜式</sup>祈年祭六月月次祭。大殿祭。大嘗祭等<sup>ハ</sup>。祝詞  
よ。忌部氏のタスキ取挂て。幣帛を取持事明<sup>ク</sup>あめ。大古  
け例ある事。いふ迄もあし。<sup>允恭紀</sup>坐探湯<sup>タガ</sup>瓮<sup>ベ</sup>。而引諸人令赴。  
曰得實則全。偽者必害。於是諸人各著木綿手纏。而赴金探



湯則得實者自全。不得實者皆傷。これを神も盟までよす。手  
よ取ふものあきよ。手繩懸るを。はや崩れたるあり。天武紀  
詔曰。親王以下云々。亦膳夫采女等之手繩。肩巾。竝無服。此  
天皇の御時と成てを。膳夫の御人々。必大袖此服あるべ  
んまど。其袖をのき舉る爲此襷あらんよハ。止らるはき  
ふ。何らぬを。かく止らました。始とゆ袖を舉るとは襷よを  
あらで。只古例を以て挂來しあまむ。今を益あしとして。  
廢られしあり。萬志路多倍乃多須吉乎可氣麻蘇鏡氏爾  
登利毛知氏天神阿布藝許比乃美。同木綿手次肩爾取  
挂倭文幣乎手爾取持而此歌どもを。手よ取るもの有ま

ど。集中手よ取ふものあく。只ふタスキを挂て神を祈る  
歌多し。皆元此意を失とゆあり。祝詞考 祈年祭此解ふ。後世  
神を拜人々しあく。木綿繩を挂るを。いこのふと懸居の大  
人も書まるとゆ。我も神道傳授此タスキとて。太き紐を挂  
とるを見し事あり。實ふ俗神道大意よ云まし如く。僧等  
此輪袈裟といふもの。如く挂とて。移れば變るも此ふ  
ぞ有りゆ。

持捧

神へ奉る幣此みふらば。上代を委べて貴人へ物を進ら  
ぬるよも。其人取受ぬふまでは。いつ迄も捧居るよや



雄略天皇の大御哥よ、ホタリと何るハ古事記傳よ、秀崎よて酒を杯ふ注き入るる器也と委しく説まるとり、按よ此のこもゆ大御酒勸免献る時ハ大御盃よ盛て捧くる物成べし又自ら好いぬふ

時々大御手よ杯を取らし、ホタリと注て奉まふこま常の事よやあらん

見えぬ也。記片御手者。繫御馬之鞍。片御足踏入其御鏡。而歌曰。云々。其后取大御酒杯。立依指舉而歌曰。ヤチボコノカミノミコトヤ。云々。此大御酒杯を取て指舉とて。大御酒杯へ酒を盛て。指舉て居ぬひあゝら。此歌を唱へぬひしあゝ。其指舉て居ぬひし間久しかるべし。雄略記三重の妹此條と見合せべし。神功皇太后記皇太后舉觴以壽于太子。因以歌曰。コノミキハ。云々。應神天皇明日入坐故獻大御饗之時其女矢河枝比賣。令取大御酒盞而獻。於是天皇任令取其大御酒盞而歌曰。コノカニヤ。云々。是等皆同じ。允恭妃忍坂大中姫命苦羣臣之憂吟。而親執洗手水。進于皇子前。仍

啓之曰。大王辭而不即位。空位之既經年月。羣臣百寮愁之。不知所爲。願大王從羣望。強即帝位。然皇子不欲聽。而背居不言。於是大中姫命。惶之不知退而侍之。經四五刻。當于此時。季冬之節。風亦烈寒。大中姫所捧。鏡水溢而腕凝。不堪寒。以將死。皇子顧之驚。御手洗水を執て。四五刻を經るといふ。雄略記。爲豐樂之時。伊勢國三重妹。指舉大御盃以獻。爾其百枝槻葉落浮於大御盃。其妹不知落葉浮於盃。猶獻大御酒。天皇看行其浮盃之葉。打伏其妹。此條よて盃を指舉といふ也。酒を盛て捧る事を忘す。又槻此葉の落浮きたるに。久しく指舉居し事も忘らぬ。仁徳記是口子臣。白此御歌







た。挂カケべきふゆ。萬三木綿ユフ疊タミ手取持テトリ而テ如此カク谷母ダニモ吾波ワレハ乞嘗コヒナム。  
君爾キニニ不相鴨アハジカモ。略解。木綿ユフもて織オリとる。布ヌをたくこて。手テも捧ササ。  
居イて神カミを祈イノるふ也。同卷。立西タチニシ日ヒ從ヨリ帶オビ乳根チネ乃ハ母命ハハ者ハ齋イハ忌ヒ。  
戸ベ乎ヲ前マヘ坐ス置キテ而ヒト一手ヒト者ニハ木綿ユフ取持トリモテ一手ヒト者ニハ和細布ニギタヘ奉ササ平間ヘ幸サキ。  
座イセ與トもふと。にぎふへとを。左右サダの手テも持テさくげつ。祈イノ。  
しふゆ。袖スズ袂タビ此條コノよいひし如ごとく。男女オノメ互互も袖スズを解トのへて。  
形見カガミとしたる歌ウタ何ナニ也。又マタ何ナニの衣出イデを取持トリていそへ。我ワ脊セ。  
子コたぐよ逢アまでよ。といふ。歌ウタ何ナニるを。袖スズを取持トリて捧居ササつ。  
つ。いゝて逢アし免メぬへせ。くく返マゼし願ネガふ事コトと見ミゆまを。是コノ。  
も其捧居ササとらん布ヌどを。久キウしゝるべし。萬五志路シロ多倍タヘ乃ハ。

多須吉タスキ乎カ可氣ケ麻蘇鏡マソカミ氏爾ニ登利ト毛知モチ氏テ天神アマツカミ阿布藝許アブギコ比ヒ。  
乃美地ノミツカミ祇布フ之レ氏ヲ額拜ヌカヅク。云ク。鏡カガミを枝エダも著ツクて獻ツクる計ケりも。  
あく。かく手テも持捧ササて祈イノる事コトも何ナニゆ。鏡カガミを少オホさくとも。重オモ。  
きものふまを。長ナガく捧ササて居イらんよは。タスキよて力チカラを助タ。  
くべきもれぞ。古史傳ト。六十七段ムナナシふ。神樂譜カミガキふ。本三嶋木綿ミツシマユフ肩カ。  
よ取りかけ。おまから神カミの。からをきせんや。のらをき。末。  
八葉盤ヤシラを。手テに取持トリて。己ミまのら神カミの。からをきせんや。のらをきせんや。と何ナニゆ。此コノ二首フタウタの韓招カラフキを。空招カラフキ禱カキを。うらて。  
言イハへるよて。我ワを三嶋ミツシマゆふを挂カけ。八葉盤ヤシラを取持トリ捧ササて。神カミ。  
招禱カキゆるを。決キ免メて禱カキふ驗ケン何ナニらあむ。空招カラフキ禱カキはせじ。己ミま。



を。韓神の如く。韓招カラフキをせじと云ひ挂カたるあり。然まむ  
此神ハ。韓招カラフキをる神といふ。古傳の何るふ本づきて。詠ヨめ  
る歌と通キえとゆ。同 六十七段。韓神とを。五十猛神イソウマケ。亦名曾  
富理神フリの事ふて。此神を蕃國カラフキを。皇美麻命スメミマノを寄せぬふ。  
御心あまを。韓神ハ蕃招カラフキしぬふといふ。古語の有らん事  
知べし。長敦云三嶋ゆふの。タスキを肩よ取のけ。八葉盤  
を手に取持て。神を祈ふといふ字。本末二首ふしとるあ  
ゆ。今世の心ふてを。長く物を持捧けつ。祈といふ事  
何るまじきやうよ思をるれど。上古の人を。心入を深く  
して。後世人のはの也。及ぶ處は何らざる也。

衣

應神 記 百濟王貢縫衣二女。曰眞毛津。是來日衣縫之始祖也。  
同卷 今求縫工女。爰阿知使主等。渡高麗國。欲達于吳。云々。  
由是得通吳。吳王於是與工女兄媛弟媛。吳織穴織四婦女。  
と何る始れ方也。百濟王とゆ衣縫此女を貢しおまむ。我  
國よされこ用おくと。受ぬひしも知らぬ。後ある方  
を。縫工女を求めしむとさへ何まむ。我國固有此衣とハ。  
甚イタくとち縫のかを也。唐さはある衣を造らし。終ん  
爲ふして。こま我國唐衣といふを。造也。起と見えと  
也。其衣をいのみといふ。袖大きく裾まで一トつらふて。



左右と打違へ。のさぬる今れ衣あり。古と今とはいさ  
さの違もあるべし。大のと同じさはあるべし。雄  
記身狭村主青等共吳國使將吳所獻手末才伎漢織吳織  
及衣縫。兄媛弟媛等。泊於住吉津。此御時又さらふ。彼國さ  
はの衣を造らし。免ん爲ふ。貢しめたるあらん。紀 孝徳 是歳  
新羅貢調使。知方沙食等。著唐國服。泊于筑紫。朝廷惡恣移  
俗。訶讀追還。後あゝる事もあまバ。始とめ我國ふ  
て縫せとるを。唐衣といへど。全き唐衣よをあらで。か  
にたる處の有らん事。知らまよゆ。萬十 辛衣君爾内著欲  
見恋其晚師之雨零日乎。此歌も全き唐衣を君ふ著せて。

唐人れごとくあして。見まほしといふよをあらば。筒袖  
の免あまし衣あらで。めづらうある大袖の裾有て。人も  
我も好まし。恥を今つとにしかぢ。はやく吾君ふ著せて  
見まよしといふ歌ふて。此頃の女れ情。皆のくるさはよ  
や有けん。萬七 住吉波豆麻君之馬乘衣雜豆臘漢女乎座  
而縫衣叙。さふづらふを。紅顔をいふあり。此歌本居大人  
を誤字ありとて。改めてはに改めつらしまごらの衣と。  
をまれとるよ。略解 よ見え。又波づまを。いあこづまを  
いふ類よて。地名とあら。さまど。此歌字れ儘よても。聞  
ゆるあり。波づまを地名。馬乘衣とて。一種あるあらば。



君が馬に乗てとそがうひしぬふ時の爲とぞうつくし  
き漢女を招き。安んじて縫せとる。此衣ぞと戯まをみて衣  
を贈し時の歌と見ゆ。吾夫を波づま君を。とそくしく  
云ひあるが興よて。此頃漢女の縫とる漢衣ハ。一トキハと  
しあどいひて。人ハ好免也し成べし。同廿 可良古呂茂須  
曾爾等里都伎奈苦古良乎意伎氏曾伎怒也意母奈之爾  
之氏略解 おもハ母あり。其子等が母をいふ。これし子を  
置て來しを歎く也。此歌も我國の衣よも欄何らんふ  
也。唐衣欄とをたまじ。我のこは衣ハ欄ありれむこそ。唐  
衣欄とよこしあ也。こそ我國の衣ハ膝迄ふ至らぬ也。知

み足まる歌あり。又古今六帖 初秋ハ。空よ霧とい。唐衣。袖の  
露なき。朝不らけうれ。と云何也。袖ハ發語也。唐衣と置とる  
ハ。唐衣ハ袖の大きある故也。唐衣欄といひ。唐衣袖と  
いふ。皆こそ我國固有の服よ異まバ云るあり。同十 朝影  
爾吾身者成辛衣欄之不相而久成者略解 朝日ハ斜よさ  
は時。人影の細く見ゆを。朝影といひて。扱其影の如く。  
瘦衰ある身といふ也。のハ股引やうあるよ。くらぶれ  
む。今ハ衣ハ右左と打のさぬまむ。欄何むといふも  
尤あり。同十 可良許呂毛須蘇乃宇知可倍安波欄梯毛家  
思吉己許呂平安我毛波奈久爾略解 久しき心せを異し



き心あり。此歌禰の打違とさへあまは。今此衣ある事論あり。若是等此歌傳らば。今の衣は上代を傳し衣ぞと。紛まをつべきあり。實は此頃迄。短き衣。股引やうあは禰著とる人も多く有りて。そまを對へてあむ。唐衣のそくおもをまて。かくさほく。小愛をこしと見えと。天武紀。又詔曰。男女並衣服者。有禰無禰。及結紐長紐。任意服之。其會集之日。著禰衣而著長紐。唯男子者。有圭冠。冠而著括緒禰。此禰あしといふ也。もし上代を正の衣かと思ふ。

禰

神代紀。投其衣是謂煩神。又投其禰是謂開嚙神。神代次於投棄御衣所成。神名和豆良比能宇斯神。次於投棄御禰所成。神名道侯神。次於投棄御冠所成。神名飽咋之宇斯能神。かく紀記ともふ。衣と禰との次第のちらねむ。今の袴と違ひて。禰を衣の下ある事先知らまを。記傳。道侯書紀ふ。此神あし。かた道饗は祝辭。いをもる八衢比古。八衢比賣。此神あるべし。さて袴の股は分まるところ處。衢の如し。故此神成坐依成べし。今長敦按。此袴は股の分まるところ。衢の如しといへる説。實は宜ふ似とめ。されど今此袴は如きハ。衢といふるのらび。ハカマとていへむ。襷積も



髡鼻禪といふは鼻の穴二つある形をいふと見えとゆ。今猿股引といふもの、甚く短き成るべし。ヒダは無き事知らまこと。

かく。今の世は股引あらんと見る時を。足結も玄べく。衢といふよとくかあへり。又此禪を。軍服も見え。船人も著とまむ。進退も便にきき物あるべからまむ。今の袴とハ異ある事疑ふ。古史傳。開嚙神名義師云。飽咋を。開よて禪を脱とゆ所也。口の開きとる貌。咋を口は轉まる。又口小見あして。咋ともいへる。咋ももと口は依れる言あらん。とゆ。長敦按よ。其脱て口の開きとる貌也。今いふ袴とゆハ。股引の方似つるをしとぞおもふ。又今此袴ハ。一チといふ所あり。市町は一チあるべし。さまむ御禪所成神名道侯神といへる。記の傳はのと字。世はハ廣く。傳

へとるものと見えとゆ。崇神記。其軍悉破而逃散。爾追迫其逃軍。到久須波之度。皆被迫窘而尿出。懸於禪。故號其地謂尿禪。書紀。よむ此段字。其卒怖走尿漏于禪。乃脱甲而逃之。云々。禪尿處曰尿禪。今此衣の上へ。今此袴著たらんふを。尿出ても衣ふこそかま。袴ハ懸るべきやうあまむ。此頃の禪ハ肌へ著て。其上へ衣ハ著とる事疑れし。されバ其衣もまよ今此如く欄有て。左右とゆ打重ぬるふを。あらざる事も。粗知るべきあり。雄略紀。臣聞易産腹者。以禪觸體。即便懷脹。諺よむこれと。此文意も禪ハ肌へ付されむあり。景行紀。於是武諸木等。先誘麻剝之徒。仍賜赤衣禪及



種々奇物。前ノ云シ如ク衣ト禪ヲ一具ト。離キぬもの  
ある事。此條を始め次々見るべし。應神記其王子者服布衣  
禪。既爲賤人之形。執楫立船。同記其兄曰。若汝有得此孃子  
者。避上下衣服。量身高而釀甕酒。云々。其母取布遲葛カサ而一  
宿之間。織縫衣禪及襪沓。記傳上下衣服カミレモノノキ  
モノト訓ベシ。鎮御魂齋戶祭祝詞ヲ奉御衣波。上下備奉  
氏ト何ルと同シ。上トハ衣キを云。下トを袴ヲ云フ。避トを  
避國ヲ云フ。避マテ。己グ服スるヲ脱テ。弟ヲ與ヘ渡サん  
と云フ。長敦云。此祝詞ヲ差御衣ヲ上下ト何ニ。亦考  
るヲ。今ハ衣ハ小ノ。今ノ袴ヲあらむハ。上下ハ衣服トハいひ

難シ。履中紀瑞齒別皇子。陰喚刺領巾レ而誂之曰。爲我殺皇子。  
吾必敦報汝。乃脫錦衣禪與之。前ニ出シ如ク賤キ船人ヲ  
布ノ衣ヲ禪マテ。こト小皇子ヲ錦ノ衣ヲ禪ト何レカ。天皇モ  
錦ヲあるベシ。然キバ其品ヲ貴賤ヲ何キズ。天皇モ庶民モ  
同シ。筒袖股引ヤウノ姿ヲあるベク。其武々しサ推テ知ル  
べし。欽明紀同時所虜調吉士伊企キ儼ナ爲人男。烈終不降服。新  
羅鬪將拔刀欲斬。逼而脫禪。追令以尻ヲ醫ラ向日本。大オラビ叫ビ曰。  
日本將齧我臍。雖被苦逼。尚  
如前叫。禪を脱テ尻ヲを出セしハ心ヲ付テ見ルべし。  
天武紀高市皇子以下云々等。賜衣袴。褶腰帶。脚帶。及机杖。此



天皇の卷と正袴の字とあま正。裁縫の違へるあらん。此末ともふ。衣れみ賜ひし事一度もれし。後れ世とれゆて。やうく裁縫を。うはまども。二賜ふ事。上代とゆの例あまバ成べし。

足結

足結も。釧と同じく男女常ふ。玉鈴を付て用ゐしもれれ正。允恭記。輕太子大前小前の。宿禰れ家よ逃入る。兵器を備ぬひとるを。天皇軍を興して。宿禰の家を圍こぬひし時。大前小前宿禰。舉手打膝。儼訶那傳歌參來。其歌曰。美夜比登能阿由比能古須受淤知爾岐登美夜比登登余牟佐斗

毘登母由米。記傳。此歌の意を。皆譬ふて。此太子を滅しぬをんを。甚易き御事あるふ。然ことく敷。御軍を起して向ひぬふは。多とへむ足結の小鈴れ落失とる。以さくのれ事ふ。宮人里人騒の如し。そを甚あるまじき御事れ正。ゆ免く騒ぎぬふ事勿ま。太子をバ己易く捕へて奉らんと云るれゆ。皇極紀。大臣蝦夷己が祖廟を立て。八佾れ舞を爲して。作歌。野麻騰能。飫斯能毗稜栖鳴。倭拖羅務騰阿庸比拖豆矩梨舉始豆矩羅符母。日本紀。脚帶手叔也。腰をも取つくらふ那正。忍の廣瀬をこたらんと云るを。かしこくも天位を窺竅を比し。足結つくらひ。腰つくらふは。



俗よ云々多づくらひの意あり。雄畧紀 黒彦皇子と眉輪王  
と。圓大臣は宅よ逃入しを。天皇兵を興して。大臣の宅を  
圍し時。大臣出立於庭。索脚帶時。大臣妻持來脚帶。愴矣傷  
懷而歌曰。飮彌能古。多倍能婆伽摩。鳴那々。陛鳴純。爾播  
爾陀々。始諦阿遙。比那陀須暮。大臣裝束已畢。進軍門。日本  
紀歌  
解 臣とハ朝廷の官人をいふ。子とを志としみ喚の稱。帛  
は袴字七重著庭よ立て。脚帶徒爲もあり。徒爲を無益よ  
餘まるをいふ。袴を七重著とる上よ脚帶を求るハ。徒事  
ぞといふあり。此歌總て比喻ふて。袴を七重著とるとを。  
天皇の恩顧は厚きよ比し。そまの上よ脚帶を求るハ。眉

輪王よ忠誠ある字いひて。さるを何と事ぞと。譬たるあ  
るはし。足結の事也。記傳 允恭卷ふ。雄畧紀の文を歌と。又  
脚帶と書る字とを。合せて考るよ。袴をかくげて。其は膝  
はあこびよて。結固むる帶と聞えとゆ。長敦按よ。前ふ言  
し如く。ハカマといへど。今は世の股引よて。其は本居大  
人の説は如く。我が意はまよかくぐて。膝のあこゆよ  
て。結固むる帶ふて。夫よ鈴を付るあり。又足玉手玉と有  
を思へバ。玉字も著し事論あり。此結固むる帶と考られ  
しを。足結のちびよて起し所を。考らまよゆをいふべし。  
こまふ因て猶考るよ。手纏も衣出を程とく。たぐはげ



て。結固むる帯あるが起すよて。いりとかく手纏を。玉鈴  
を付る爲れものゝやうふをあすしあす。一萬十 朝戸出公  
足結乎アユヒ 閨露原早起出乍吾毛裳ヲ。ヌラスツユハラノハヤクヲキ。イデツ、ワレ。モ。モスツヌラサナ 閨奈。此を足結といへど。  
膝の下よて結固むる帯ふをあらで。次よこゆる旅具の  
脛巾ふてもあるべし。女の家遠けまバ。馬よても行事あ  
まバあり。一萬十 天在アマナル。ヒトツタナハシ。イカデカユナシ。ワカクサノ。ツミカリトイヒテ。アユヒレタ。ス。略 一棚橋何將行穉草妻所云足莊嚴  
解 宣長云。莊嚴ハ。結發れ誤よて。妻のすよと云て。何ゆひし  
あゝと訓べし。といをまよるハとし。タ、スをたりあ  
ゆ。一首の意字。言葉の上よて解のぞ。珍らしき一棚橋何  
也。此國土れものをハおもたまは。あくを天上よてもあ

るべし。此橋をいかゞして渡らん。さまバ妹のすよといひ  
て。とく足結して。出て立んといふ成べし。天形をゆひむ  
しさは。其事有る戯まをみし歌と見ゆまバ。其委しき事  
を知らまがとし。若くハ此足結も脛巾あらん。扱次よ  
見ゆカミ 糸葉よて作す。行纏れ末字。足の甲へ亂し。の々  
こるを思ふ。禪の丈も長くて。足は甲は隠る。程ふて。  
足結まを。足は運び。ことさらをきふや。又衣出ソデの指よ  
ゆ長きを思ふ。上代れ人を肌を顯事ハ。好ざすし成  
べし。宇受賣命れ胸をあらはし。その上よ乳をけへ。のき  
出し。とるハ。いと爲し難き事ふて。神達の甚く笑ひぬ。



仁德皇后奏言。嶋鳥皇女。寔當重罪。然其殺之日。不欲露皇  
女身。と有るを思ひ合ふればあり。萬十和可久佐能安由  
比多豆久利無良等理能安佐太知伊奈波於久禮多流。冠  
考若草は足結とつゞるし意を。和名抄行纏新抄。本草云。茵  
和名。以知比。今俗編茵爲行纏と云。此類よて。草もて  
むきを作まバ。若草の足結をはいふあり。いちびを菓カラシふ  
て。麻の類あり。夫を以て足を包て。末を亂しかけとるも  
れ。古畫よ多し。此歌旅行の時れ歌よて。和名抄よも。行纏本  
朝式云。脛巾俗云。波々木と云。今もはぐきとも。又脚  
半ともいふ。是をも古へ足結と云ひしあり。神代をり傳

てにぬる。足結を本居大人の説れ如く。膝のほとにてよて。  
結固むは帯ある事。紛まほらしを。前よ見ゆる。雄畧大臣  
出立於庭。索脚帶。云々。大臣裝束已畢。進軍門とあるを。脚  
帶の文字よてハ。神代をり傳をよて。足結の如く思は  
るまど。軍門ふ進むと云。旅行よさへも。脛巾ハキを用ゐ  
し。のバ。軍門ふを。今ハ臙當やられもの有て。夫をも足結  
といひし成べし。さるよ因て猶考ふる。神代より傳ハ  
とる。脚帶を足結アユヒといひ來て。夫をり後出來る。脛巾も。  
臙當も。皆ともふ。足結といひしよ。其品を異あれど。何  
ゆひと唱ふるよ付て。此雄略紀よを。臙當をも。脚帶を書



しあるるし。

衣替 借衣

上代を男女互ふ衣をのへ。又借事あり。此事人の大小ふ寄て。衣も大小あまき。今の世は心よて。女は衣を男は著らるまじき。此衣のへせし頃。衣の丈けは。膝に至らぬ程のをれとこゆま。長短いづまふてもとるべし。筒袖は太も。男女凡同じ程あらん。誰ま著ても。其行きの長短あるのみと見え。其行は長短も。指の先へ出るの常あまき。少し短くと長くと。このるべし。用は時たど。衣うに歌多くあま

ど。其一二をのぐ。禪ハのふる事無<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>べし。萬一<sub>ニ</sub>宇治

間山朝風寒之旅爾師手衣應借妹毛有勿久爾<sub>レ</sub>あらあ

よむ。あらぬのぬを延て。あくと成あるあまき。只あ

ぬといふよゆハ。此歌よてハ。歎息の意深くれるあゆ。さ

べてあくよといふ歌。語勢ふとめて。さほく。よ變まる

を。取集て別ふ考置とゆ。同十<sub>ニ</sub>吾妹兒爾衣借香之宜寸河

因毛有額妹之目乎將見<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>の句をとしといえん。序あゆ。

あらぬのハ。あまかしれゆ。妹が目を見ん。よしれあれか

しやいあ。同十四<sub>ニ</sub>筑波禰乃爾比具波麻欲能伎奴

波安禮<sub>レ</sub>伎美我美家思志安夜爾伎保思母<sub>レ</sub>畧解古ハ男



女衣を互ふかして著せしむまば。あつのしき君が衣を。著まわしといふと考合べられど。猶とも寐して重祔きん。事をいふあるべしと。翁の説あり。宣長云。是を京とゆ下正とる。官人あどれ。衣服れ美を見て。と然るあるはし。長敦按よ。京より下正とる。官人の衣服れ美をこそ。賤き身として。其美服を著まほしといふ意よて。感合る所あけまば。此歌字。人愛て傳ふべらんや。こは衣服の美惡ふかくをらば。京とゆ下正居る。官人れ若きあどを。筑波女の恋慕ふ心よ正。詠出しあらん。催馬ふ。衣のへせんや。さ公達や。我のきぬを。野原篠原。萩の花摺。といへるも。さ

きんれ。さハ添とるれ。ふて。野原篠原を。あぐ原といふを。何やよ云しあり。うるはしき若君を。衣のへしてあへのし。我衣ハ萩う花よ摺とる。とき衣ぞやといふあり。我衣を不絶て。かくいふ古體のさほ字。まび味ふはきれ正。此歌を以て考合合るふ。我の筑波瀬れ。新桑まゆの新しき。衣著てを何まど。何やらあやしく。君が衣れ。著まわし。さよといふ歌あり。かく上べハ輕くいひのべとまど。下よを慕ふ心の見ゆる歌あらばや。萬十道爾相佐婆伊毛。雅世流管笠小笠吾宇奈雅流珠乃七條取替毛申物乎男。女互よ其品を取のへ持て。恋れ情を慰る事。古人れ真心



とめ出るふて。且雅あり。此品を取のへ持とりも。著あま  
の衣を。互に取替て著んよを。其情今一段深のるべし。又  
袖袂は條ふ見えし。衣の衣出を解替て。互に形見とせば。  
男をさるもはあのら。女は心ふしてを。其袖をいかぞの  
正齋ふらむ。又其片袖あき衣を。己が物あら。此ちあこぬ  
まバ。朝夕肌をどふ。離さて正けんとぞ思をる。そハ上  
代の人。此情の厚きををとく思を。誰もさや正あんかし。

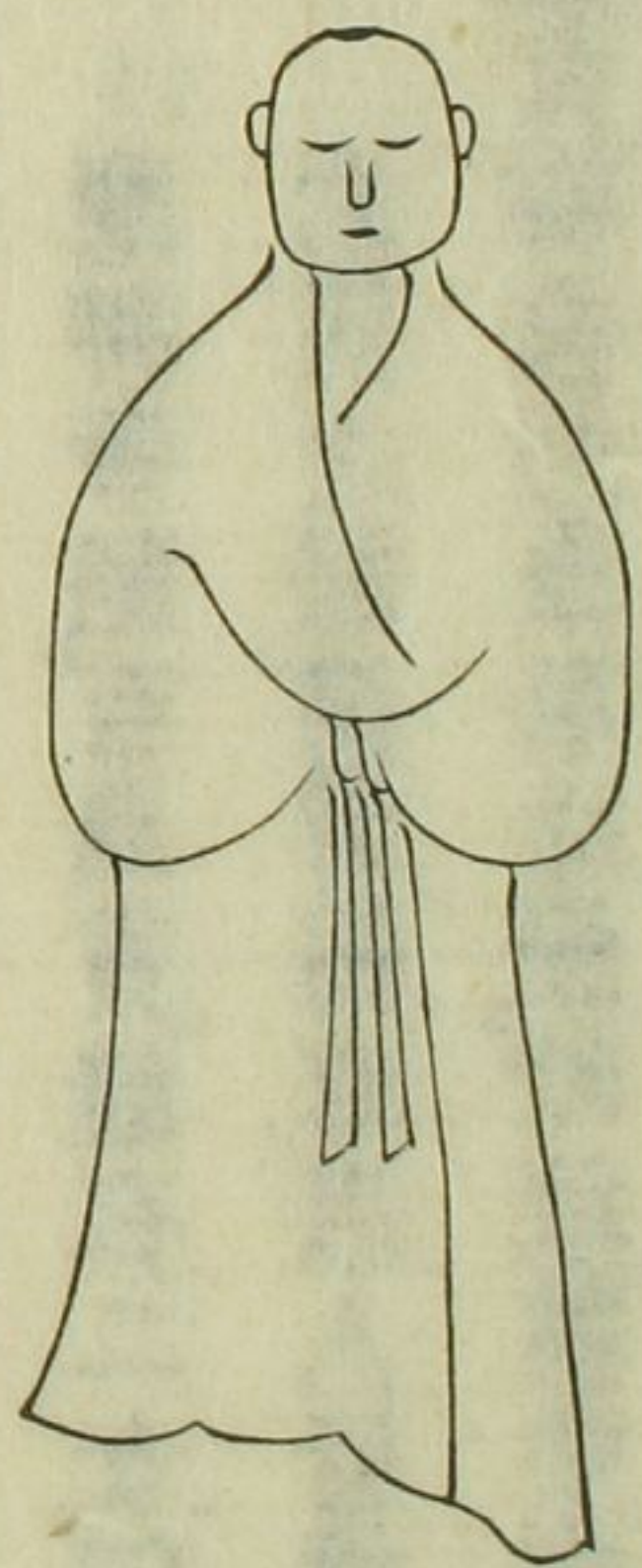
附言  
上古衣服タゞ千早アルノ三。日本紀ニ。神代ヨリ衣  
裳ノコアルハ。固ヨリ異邦ノ服ノ三。千早ノ製。一條ノ布  
ヲ用ヒ。此ヲ著スル。其一條。横幅ノ中間ヲ裂テ。頭ヲ出シ。  
其兩端ヲ以テ結束ス。日本変釋ニ。中衣ト云是ナリ。云々。

日本変尺云。 應神帝朝。百濟貢縫衣二女。曰眞毛  
津。始習縫補。 君臣之間。纔著韓衣。庶人皆裸形。但  
依百濟人貢。雖有韓衣。竝桑帛之類。時收禁中府庫内。  
藏是也。纔著中衣。蔽其前後。云々。

河内國石河郡。山中古塚ニ。殉死ニカフルノ土物。一枚ヲ



掘出ス。其體左衽。挾袖左ノ如シ。天智朝己前ノ物タル。察  
シテ知ベシ。以上衝  
シテ知ベシ。口發



此上古衣服ハ。タゞ千早アルノミ。神代ヨリ衣裳ノコ  
ルハ。固ヨリ異邦ノ服ノミ。といへるハ。神代よゆ人の代  
と成ても。上古を千早といふもの。みよて。衣服をふし  
やいふ事と聞ゆ。先紀伊弉諾尊投其帶。是謂長道磐神。

又投其衣。是謂煩神。又投其禪ハカ。是謂開嚙神。といふ。又  
天照皇大神の縛裳ヒキツル爲袴ともあるを。おもをさるよや。此  
大御神達ミコノミハ御時。既スハ御衣服をさらふ。御帶までも備  
はぬへるふ。瓊ニギハヤヒ々杵尊の天降まル時。此物等モノを授  
けぬはざらんや。此尊一柱イツツツハみ御衣服あらせらま  
て。御供の神達ミコノミハ皆裸形。纔シカハ中衣のみといふ事。あるべ  
あらば。又此尊の御子ミコハ。繼ツグ々神武天皇へ傳へ  
ぬをざらん。御供ハ神達も。其御子ミコ々々へ。つゑぬハば  
らん。はまむ衣服ハ。神ハ御代ミコノトキとゆ人の代トキ。傳へさせぬ  
ひとるも。はまむ。即神の賜ミコトノサマシふ。さゆ字神ハ御代ミコノトキふ衣ヒふ



く。上代よ衣あしとをいふく思ひ迷へるあ也。應神  
帝朝百濟云くとあるは此。天皇の御時縫衣の二女  
を貢しと也。君臣の間それ韓衣を著とれども夫迄を  
天皇といへども中衣斗ありといふ事を聞也。世ハやう  
やう開々て物の整ふ事を自然あまば此。天皇を十  
六代よあたらせぬへバ神の御代と也傳をゆし御衣服  
のいとく整べき御頃あるよいのでう其御頃迄御衣  
服をあくて一條の物を御身ふ纏ひぬふといふ事の有  
るべきや。誰も此説を信ぶる人をあらじのし。扱埴輪を  
垂仁天皇の御時野見宿禰の造也始とる物あまど此掘  
十一代

出しとゆむ髪を頂ふ結る也。古事記具與黃泉神相論莫視  
我如此白而還入其殿内之間甚久難待故刺左之御美豆  
良湯津津間櫛之男柱一箇取闕而燭一火入見之時。古史傳  
御美豆良此を御紀よ髻とほ也。正字あり師云美豆良は  
上代よ男の御装ふて髪を左右へ分て結縮とるものあ  
ゆ。下ふ天照大御神也。解御髪而纏御髻たまふとあゆも  
息長足比賣命の檀日浦ふして御髪を解して海よ入洗  
ぬひて占ぬふよ。御髪自分まことる哉。即其分まことるま  
よ結多御髻と爲とまふ事ゆも仮よ男貌と爲ぬふあ  
ゆ。まよ。崇峻天皇卷よ。古俗年少兒年十五六間束髮  
ワカキヒト  
ヒサゴハ



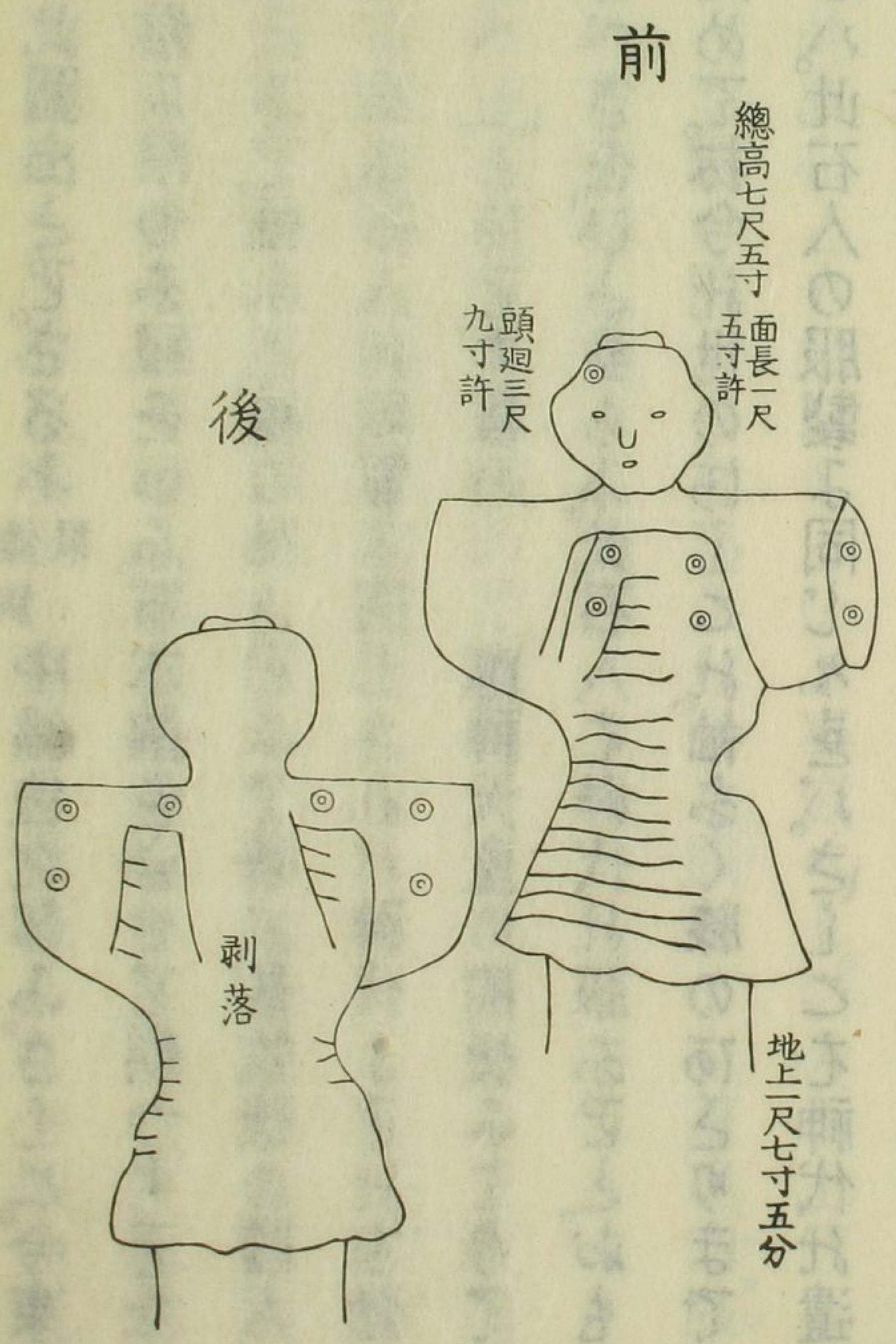
於額<sup>ナニス</sup>十七間分爲角子<sup>ミツラ</sup>。今亦然之。とある。此角子即ち美豆  
良<sup>ナニス</sup>也。十七間とあるハ、や、後の事あるべし。いと上代  
げまきと訓る也。後の稱<sup>ミツラ</sup>あり。即ちづらと訓べし。萬葉七角髪也。左右は有るの  
角の如くある故ふ。の、は稱を有あり。後世は鬢<sup>ヒムツラ</sup>頰と云  
訛まる言ぬ。江次第は、幼<sup>ミツラ</sup>主之時、垂鬢頰ともあり。扱<sup>ミツラ</sup>のは、大御神は御装の所哉  
以て見まは。美豆良も珠を飾<sup>ミツラ</sup>しる也。二十<sup>ミツラ</sup>は、阿母と  
じも。玉もものもや。いゝきふ。美豆良の中ふ。何へまう  
まく<sup>ミツラ</sup>のく委しく説き。此萬葉集は歌也。孝謙天皇<sup>ミツラ</sup>  
の天平勝寶七年は歌あり。されど其頃迄ハ、天の下は人  
皆とづらふ結しよハ、何らじ。我國は衣の年経て、やうく

唐衣也成<sup>ミツラ</sup>果し。の如く。先髪を唐さほふ。頂も結ひ始し  
とゆ。人皆残りあふ。唐様と成果した。いとく年月を経た  
るべし。さまは其間也。我國振と。唐國振と交<sup>ミツラ</sup>して。此歌の  
頃也。いまごころづらよ結し人の有しあり。扱其唐様は始  
て考るよ。神功皇后は御國へ歸らせぬひて。やめて  
我國の風俗を改めさせぬふべく。崇<sup>ミツラ</sup>何ら祐む。まは  
應神天皇は漢衣を造らし。然し頃とも去べき也。さま  
む此掘出ある也。髪字頂も結とまは。此 天皇とゆ後  
は物ふて。我上代衣服考は證ふを立難し。然まとも袖の  
細きハ。我國振あり。又裾まで一<sup>ミツラ</sup>つらよて。打違へとる也。



漢衣ありてして猶考ふるふ 應神天皇の御代より始て  
 漢衣を造らしめとてとも本書より言し如く全は漢衣ふ  
 ハ何らで變じたる所有べれれ此埴輪の袖は細くと  
 も此頃の漢衣成べし又左袷あるを思ふよ續日本紀 早代 元  
 正天皇は養老三年より初令天下百姓右襟職事主典已上  
 把笏をほまむ此 天皇の前あるら袖細きハ既  
四十七代 天武天皇の大きある御袖を振らせらきて御狩野を歩  
 行らましを愛奉し歌ほまむ此 天皇をゆ前あれむ  
 成べしされバ此埴輪を 應神天皇の後 天武天  
 皇の前あるものあり

好古 筑後国入形原也。二十代 繼體帝御宇筑紫磐井造タル  
 石人ヲル故。後世其名有ト云。按云々。





如此圖出と<sub>レ</sub>也。さる<sub>レ</sub>小<sub>葉</sub> 倭訓 中編佐之部<sub>レ</sub>。さしこ。今東鄙  
の俗<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>衣服をいふ。布木綿を合せて。刺つ<sub>レ</sub>也。たる  
も<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>も。袖<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>膝の<sub>レ</sub>何と<sub>レ</sub>也。まで著<sub>レ</sub>。是筑後の國人形  
原<sub>レ</sub>ある。石人<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>服製<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>同じ<sub>レ</sub>され<sub>レ</sub>バ<sub>レ</sub>神代<sub>レ</sub>也。此<sub>レ</sub>衣體<sub>レ</sub>を  
依<sub>レ</sub>べし。と<sub>レ</sub>也。衣服ハ 應神天皇の前後<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>りて考  
有<sub>レ</sub>べきを。ひと<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>らふ。此石人を神代<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>也。おもひ  
定めて。扱<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>世の<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>也。袖<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>膝の<sub>レ</sub>何と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>まで<sub>レ</sub>あ  
るハ。此石人の服製<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>同じ<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>バ。さしこ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>神代<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>遺風  
とおもひし<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>り。上代<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>也。衣服<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>から<sub>レ</sub>よ。いつ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ても。  
今<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>袖<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>物の<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>く。略<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>あ

き<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>じ。 萬葉 貧窮問答歌<sub>レ</sub>。綿<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>肩衣<sub>レ</sub>と  
何<sub>レ</sub>也。 同十 竹取翁の歌<sub>レ</sub>。も<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>肩衣<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>也。縫<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>とも<sub>レ</sub>何  
る。此<sub>レ</sub>肩衣<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>袖<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>事成<sub>レ</sub>べし。い<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>上代<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>れ  
む<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>て。雪の降<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>べき<sub>レ</sub>を。胴<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>て。四肢<sub>レ</sub>を  
覆<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>らん<sub>レ</sub>や。

或人<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>く。上代<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>釧<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>也。脚帶<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>バ。筒袖<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>股引<sub>レ</sub>や  
りの物<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>え<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>ど。衣<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>の  
指<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>差<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>也。何<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>し。  
確證<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>。答<sub>レ</sub>曰。確證<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>らん<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>ハ。古人<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>落  
去<sub>レ</sub>べき<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>し。世<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>西洋の國<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>む。甚



く嫌ふ癖あるもあまぞ。今我説を尤おめとておもひお  
のら。筒袖股引ハ。西洋の國振あるが心とのらびでのと  
云るふや。まゝ實ふ筒袖ともいひがとく。股引やらの物  
とも定め難き。其證有ていへるよや。聞えとるよ似多  
ぞ。まづ夫よして置べしといふ事ふ聞也。の正ふも筒  
袖を穿る時ハ。振るべき袖ハおきぬまバ。袖振るととめ  
る古歌どもを何とくせん。袖の差出とる所を。振依よめ  
外をふんまバ。其確證を得よや及むん。殊更衣出の差出  
とる。證の薄くもこれのまあるものをや。

一 大國主は神は御歌よ。オスヒヲモ。イマダトカネバ。記傳

よ。此名をオソヒと通ひて。襲覆を約免たるあり。扱其狀  
を一幅ふはま。二幅よまま幅の隨よいと長き物あるを。  
後世の婦人ハ被衣おどは如く。頭よゆ被<sup>カウ</sup>にて。衣の上を  
掩ひ。下を襷まで垂るを見也。其著るさほを試よ云む。  
中央の處を頭よ當て蒙<sup>カウ</sup>。左右へ下して。帶の何とゆよ  
て。遣違へて腰ふまとひ。前へ回<sup>カウ</sup>して結ひ。端を襷へ垂  
ゆ。あるべし。とあり。今按一條ハ帛以て。貌字隱<sup>カウ</sup>をの  
正<sup>カウ</sup>に纏むんよ。此大人の考ハ如くも穿べきあり。かく  
爲んふも。後世ハ如く。大きある袖あらんよハ。其袂ハ垂  
たる端の。自ら結ひ込らまで。手を遣ひぬべし。是も筒



天武天皇紀  
 令天下脫脛  
 裳一著白袴  
 と有り。明月  
 記。天福元年  
 五月十二日。  
 石清水八幡  
 宮云々。御正  
 躰鏡鳴動云  
 々。と見也。後  
 鑑のとめ記。

袖と見る時を。此オスヒを。いの身ふ纏ふとも。手を遣  
 ふよ害あらじ。上代よオスヒ有て。後世ふきも。筒袖の一  
 け證と云べきなり。

此圖延喜年中式内。諸社奉納鑄形神像と。紙上よ見ゆま  
 ど。衣服のさほ。いふも上代よのあへるものあり。こは  
 養父黒川。春村の寫し置と云しを。我又寫せふなり。正と眞  
 頼大人いへ。此圖髪を角子よ結ひて。筒袖け指とゆも  
 長きを著とるさまよ見ゆ。又禪ふを。横ふ襷積ダのるう如  
 く見ゆるを。若や少しくたぐ正上ぐて脚帶ヒ爲とゆを。其  
 脚帶ハ略たるよもあらん。是ぞ 應神天皇の御代よ

正前の姿ある事古書よのあひ。眞よ神の御姿あるべし。  
 其眞物を見たきものあるを。其眞物をいづまをゆ出て。  
 今いづまよ有といふ事を記さばといへ。悲しき事あ  
 べ。正されど此神像を。全く延喜中諸社よ納たるもの  
 あらば。多く此中よハ。今此世よ傳たるも有て。又世よ知  
 る。折もあらん。

延喜年  
 中式内  
 諸社奉  
 納鑄形  
 神像

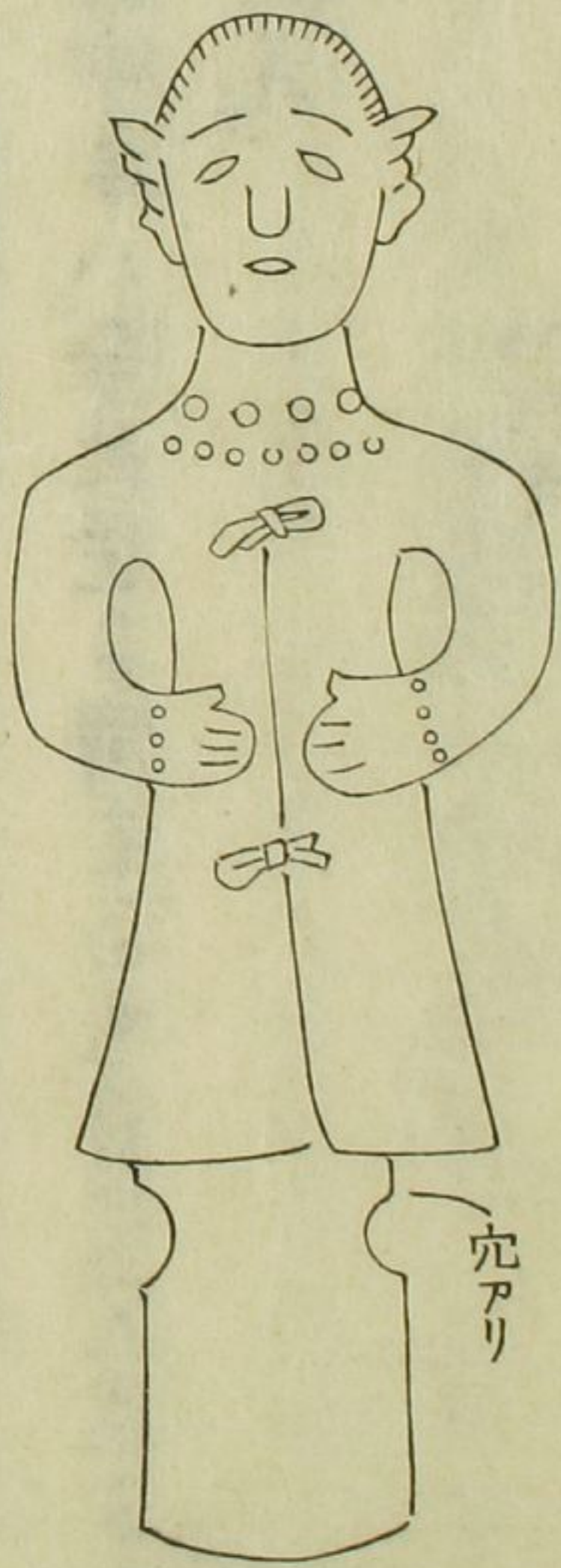




桂林湯録 或人上埜國那波郡。波志江村ノ相山ト云所ニテ。見  
タリトテ。瓦偶人ノ像ヲ圖ス。其狀奇古ニシテ。聊大古男  
女ノ服飾ヲ想像スルニ足ルモノナリ。

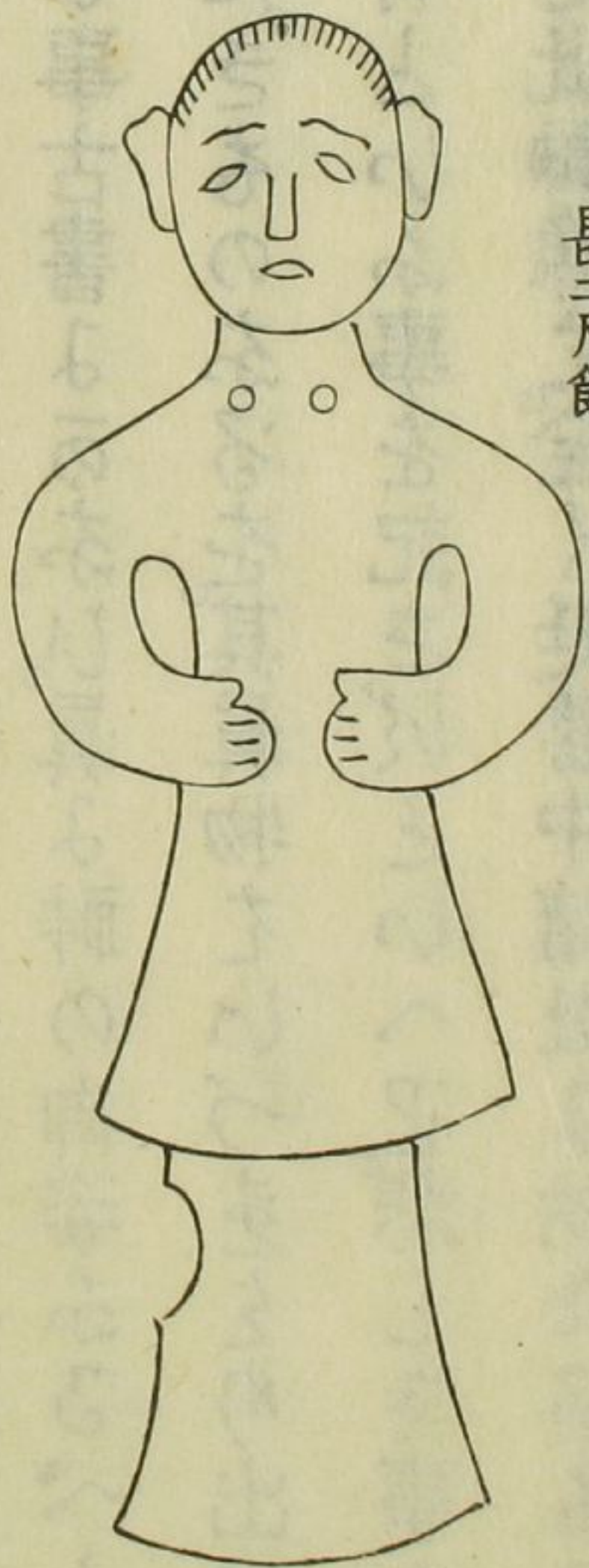
瓦偶人之圖

中良按ニ頸  
ニ挂タルハ御統  
ノ玉腕ニ纏ヒタ  
ルハ手玉ナリ。上  
古ノ制ヲ考フ  
レハ此ニノ像ハ  
女ト見ユ。



長二尺餘

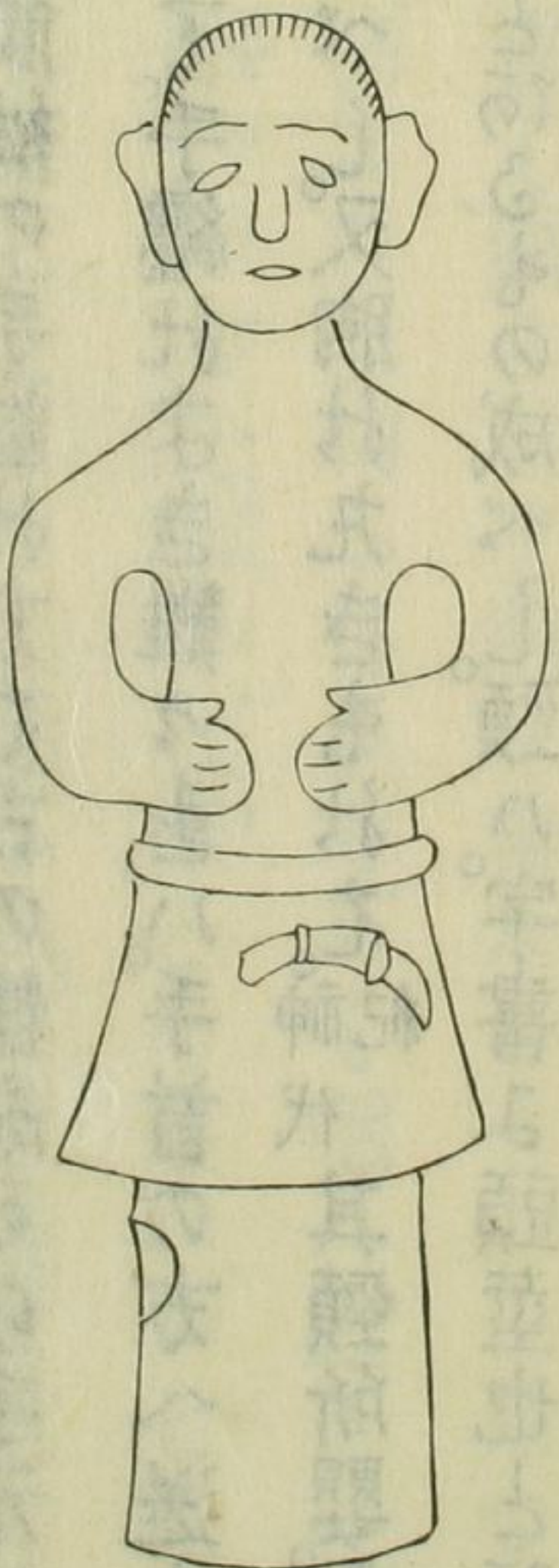
穴アリ



腰ニ佩タルハ紐

小刀ナリ

此像ハ男ト  
見ユ



今長敦按ふ。此圖神代ノ近きものとハ見ゆまど。先づ上  
代を髪を角子<sup>ミツラ</sup>ニ結ひしを。 應神天皇の後を。頂<sup>ミ</sup>ニ結  
ひしも知<sup>ヒ</sup>ビ<sup>ノ</sup>とし。は<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>此圖<sup>ニ</sup>髪<sup>モ</sup>あ<sup>ハ</sup>れば。大古中古  
此考べきとし形々まど。筒袖<sup>ツツ</sup>にして長<sup>タケ</sup>此短<sup>ミ</sup>きを。上代<sup>ノ</sup>  
服ある事。古書よりあへり。然るに上代<sup>ノ</sup>の衣<sup>ソ</sup>出<sup>デ</sup>ハ。長くて  
指<sup>サ</sup>見<sup>ミ</sup>え<sup>ス</sup>然<sup>シ</sup>苦<sup>ク</sup>れるを。此指<sup>サ</sup>の見<sup>ミ</sup>ゆるを思<sup>シ</sup>へ<sup>ル</sup>。若<sup>カ</sup>く<sup>ハ</sup>た



親胤君云記  
 伊邪那岐  
 命の御頸珠  
 之玉緒母由  
 良近取由良  
 迎志而とも  
 あまむ頭を  
 り胸へ垂ぬ  
 ひし事論お  
 されど其を  
 此大神を始  
 め奉り人の  
 代と成ても  
 貴人のこち  
 るべしおく  
 に見ゆる波  
 志江村より  
 出たる壇輪  
 も武蔵国兒  
 玉郡若泉山

より出たる  
 壇輪もとも  
 は頸珠を咽  
 のみ纏ひ  
 とまば庶人  
 ハ珠字多く  
 得る事の難  
 々れバのく  
 咽は此み纏  
 ふが常よて  
 貴人と賤人  
 とハ同じさ  
 まふらさば  
 しれるべし  
 但此若泉山  
 より出たる  
 壇輪の図末  
 は記矣

ぐり上げて。襷ヒダ積ダの有べきを。そのヒダを略あるものう。又  
 始の圖ある。手首れ所の丸きもれハ。手纏ミは著たる玉と  
 見ゆまど。本文よ云し如く。和名抄在臂上者。名之為釧比知  
 といふふの形をば。此をいひのちる事和名抄も捨グ  
 とく。おれ圖も又捨のとし。とて猶考るふ。大古の筒袖  
 も。世のやうく下ヒ行ミは隨て。人々唐樣ヒ大袖を好む  
 世とちる儘ミ。筒袖の手首れ方ヒ。古の儘ヒのら。手元ヒ  
 方を太く爲して。手纏ヒはまき難々まハ。手首の方へ送め  
 とるよも何ヒべし。又胸ヒ丸きもれヒ。神代紀其頸所嬰。五  
 百箇御紡之瓊ヒとあるもの成べし。頸ハ。字書ヒ頭莖也とあ

て。瓊ヒ字緒ヒ貫て。頸ヒは挂て胸へ垂たるものと見ゆま  
 ど。此圖ふてハ。何ヒまゆは胸ヒ有るや。おて咽へ近きハ。い  
 のよぞや。萬十吾宇奈雅流珠乃七條とあるハ。必七條ヒ  
 も何らば。幾條ヒも垂しとるうと思ふよ。三國通覽圖説ふ。  
 蝦夷人の頸玉挂とる圖あ也。

蝦夷上  
 品ノ女

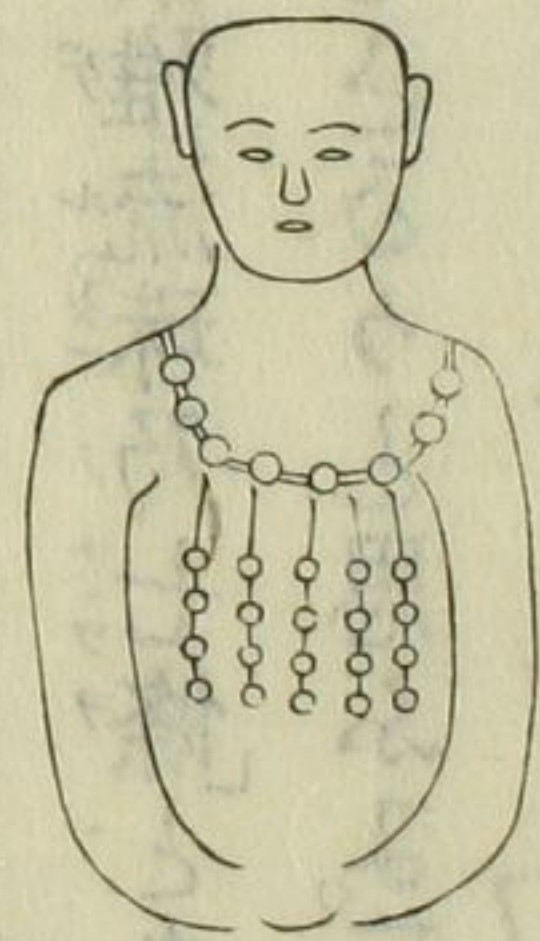


○上代衣服考

○五



のく胸れきをよあらば。臍のあとに迄。ゆるやのよ挂と  
 め。此頸玉を挂て。左衽あるが。今蝦夷も残して居るも。奇  
 しき事よ有らぬ。扱此蝦夷の女此圖と。前の七條とい  
 ふを合せ思ふ。上代ハ頭を胸へつけ。其胸れはとて  
 とめ。幾條も垂しとるよも。あるべし。其圖



又上代の衣よ。紐有した。いふ迄もあし。其紐を。此瓦偶人

を見まハ。二所よ結ひとて。さも有ぬべし。其紐を後よハ。  
 高麗錦紐とよこし歌。萬葉集中よ。二三首あゆて。其錦を  
 見せんとも。頸玉をいく條スチも垂し。事ハ止め多。かく咽と  
 紐との間迄とあしたるよや。さまむ此偶人を。上代のさ  
 はれ少しうつて變てし頃のもれよも有べし。眞頼大人  
 也。此眞物を見し。其質古き瓦の如し。那波郡と書しを  
 誤あり。佐伊郡ありと云て。今我を此圖をのみ見し上れ  
 論よて。初の偶人れ耳を。いのみも異ふして。考べきやう  
 あり。寫誤よやとおもへむ。手纏も頸玉も。又覺束なく思  
 へまむ。此眞物のいとく見まむしきあり。されど此圖を



此み見ても。上代の衣は。筒袖タケスエにして。長短く襷タタあうアウ也。といふ。我説此慥タシある證アトふを有アる也。

一 蝦夷人ハ。我上代の風俗残まり。又清國の人。此頃我國へ來るを見まむ。筒袖タケスエにて。指ササ先へ一尺斗も長く差出サゆ。清の本國ハ滿洲マンシュふむ。其滿洲を北蝦夷とも唐太とも云る嶋と。一海水を隔ヒとるのみあまマバ。遠トのらラば。是皆其始め我上代の風俗フソクにて。筒袖タケスエは少し指ササとめ長ナガかりしシ。數年スズメトシを經スるまマふ。蝦夷の人ハ袖スエハ。手首テウデまでとあり。滿洲ハ今の如く。甚シく長ナガく成ナたるもれレあらんラのをヲおもひしシ。後ノチと考カまマバ。千萬マンナン此國コク。その開闢カクハクの時トキハ。自ら我

皇神達の御衣服より出て。皆同じのツ也ニ。しも。有アるんノのミ。

神樂譜 入綾 宮人ハ。おちとそ衣イ。ひぎとちしき。此レとろしもと。

おちとそ衣。此歌古語拾遺云。磯城瑞垣の朝アサ。倭ヤマトの笠縫カサヌイの邑ウチ。天照大神アマテラス。及び草薙クサナヒ劍ツルギを奉遷ホウセン。其祭マツルは夕ユフ。宮人

皆宴樂ウタガハシハ。歌曰ウタハクミヤビトノ オホヨスガラニ イサト

ホシ ユキノヨロシモ オホヨスガラニ 今俗歌曰

ミヤビトノ オホヨソゴロモ ヒザトホシ ユキノ

ヨロシモ オホヨソコロモといへるを。詞の轉マりマと

あまマど。此歌を元もととめ今の如ごとくうたひしシあア也ニ。一首ヒトクサ此意



を。宮人。大装ひ衣。たけも膝まで。長くと布して。ゆるや  
のよ。著れ。とろし。と云あるべし。小忌衣。對へ。此の如  
く云う。又もとハ。ちまとの賤。大宮人の袖付衣を。うら  
やみて。とめるよも有べし。其時ハ。きれとろしハ。著て  
る。としき心。あ。以上採用。今按。大宮人。唐衣を著。庶人  
多く古服。著て居る頃。の歌。其貴人の漢衣を。終て  
とめ。ゆ。あらむ。是も我。古服。膝まで。到ら。證とハ  
とべきあり。

一 上代。人の衣服。神代の儘。今。世。筒袖の半天  
といひ。股引といふも。如くあるべく。女ハ。只其上。

裳を装ふまでと見ゆるを。以。ま。俗意。賤しとおも  
ふべ。のら。甚く装束。立走。の。と。や。ら。さ。る。  
神の御心。の。ぬ。ふ。べきやハ。此。進も退も。と。ゆ。能。こ。そ。  
神。御心。あるべ。れ。扱。書。紀。一。所。記。も。一。所。聞。え。の  
て。ある。所有。て。我。の。此。説。も。響。る。を。早。く。本。居。大。人。  
平田。大人。の。説。あ。其。紀。天照大神の。素戔嗚尊を  
待。ぬ。ふ。時。結。髪。為。髻。縛。裳。為。袴。と。あ。ま。と。上。代。衣。ハ。膝  
の。と。と。迄。あ。れ。男。神。も。女。神。も。や。も。に。禪。を。著。ぬ。ハ。て  
を。得。あ。ふ。ま。し。き。ゆ。又。禪。の。字。ハ。本。文。云。し。如。く。記。次  
於。投。棄。御。禪。所。成。神。名。と。の。る。を。始。終。ふ。て。次。崇神







一、佩裳の傳言也。上古ハ男女共禪の上ヲ裳を著せしあり。又云、男の禪と女は禪と製いさぐり異あり。ざる故。天照大神の御裳を男はハカ一の如く、著あさせぬしぬるべし。凡て腰下は著るものをモといへるあり。

て。古史傳よも此處の文よ。御帶を投棄。其次よ御衣を投棄とありて。此間よ御裳字投棄ぬひし。事此無き字おもへむ。平田大人も。こゝに御裳とあるハ。思たまし旨有りて。書載らまざりしと見えとゆ。さまむ此裳と。前の袴と此こと已ゆを。我今學あき身ふしてハ。いのもとも言ひ出べきやうもあらぬを。かく兩大人の説置まとするを。いととし。扱男を禪を著。女ハ禪よのをゆて。裳を著たゆはあらび。前よ見えし如く。御帶を投棄ぬひ。次よ御裳。次よ御衣。次よ御禪とある。此次第を以て。禪を衣の下ふ著て足結せしもの。裳ハ衣の上よ装ひ。腰下ハ二重ありし

事知られと也。

一 或人云。上代を筒袖の衣よて。其袖の上よ釧を纏しといへど。古事記阿波岐原よて禊祓しぬひし時。御帶よ所成神名何。次よ御裳。次よ御衣。次よ御禪。次よ御冠。次よ左の御手は手纏。次よ右の御手は手纏と有て。此次第よて。手纏を御衣は下ふ非びや。答曰。紀記共よ同し傳あまは。ばどろあまど。紀は傳よてハ。泉津ヨモツ平坂ふて。御帶を投ぬひ。次よ御衣。次よ御禪。次よ御履とありて。手纏字投ぬふ事をぬし。こをいづきをらしむべきよもあらび。凡て神書ハ。二方よ傳へとするも有也。又紛しきも有まど。いと遠



しとも遠き。天神地祇の御上を。我國おまきバこそ。か  
むのゆよも言ひ傳へこれ。尊しとも尊き事よを有り也。  
さまバ人の世と成ても。他の國れさまれ混らざる頃を。  
神代れ儘あるべく。今我おほけおきもの。のら。

大御國れ上代れ服を。考まほしく思ひ成しをゆ。其理の  
限也。是と彼を照しはく。いので其實を得んと云るよ。  
釧を玉を著け鈴を著たるものよし。あまむ。衣の下に纏  
べき理おきれみあらば。其衣を本文ふ言し。が如く。袂と  
云しも。古を垂とる端を云ひし。よあらば。襷といひしも。  
袖を擧とるものよ。あらざ。あど。おもひ合されむ。筒袖

あるべく。筒袖あまむ。釧も纏る。あゆ。上代よ釧有りて。  
今れきも袖の變れる故あまむ。バれるべし。本文ふ言し。  
上總國東金町れ傍ある。山をゆ堀得とゆといへ。古器  
を相川定成といふもの持とせし。ぐ。文政十二丑年れ火  
災よ。土藏やもよ焼て。灰れ中をゆ取出しとるよ。全體少  
しも損をび。又天保五年年の火災よ。床ふ花あど入置  
て。此時も其儘焼ぬまど。又つ。のあり。巴々まバ。此物を  
神代の物と聞及びし。の。かく兩度まで甚く焼ぬまど。恙  
あきハ靈異れ物ありとて。元の上總國へ返えし。やぞ。さ  
るを人々の手を経て。我ま。其もれを得る事よ成ゆと



れど。其始ハ瓦の如き色ありし。焼て此後を黒く成て。本色を失へるをいと遺憾<sup>クナラ</sup>し。然まども其さは圖に如く尋常あらば。千歳此古物を。誰もおもえり。ものあるべ。本文の頭書よ出たし。雄略天皇の大御歌よ。ホタリと遊し。を疑ふ。此も此成べしと眞頼大人云ふ。又東金町よ近き。松之郷村といふ所。山崩きて出たる瓶も。い多く古物ものよ。昔齋藤彦麻呂大人見多。是ぞ齋瓶あるべきとて。まはる。今此現よ。この此腹。こゝちあらべり。昔をぞおもふ。と詠ま。と記き。本文ふ齋瓶の歌も引出。まは。あ。其圖を出。此齋瓶あるも。我

若の正し頃を。此外よもあらず。尋得たま。今ハ絶て見る事なき也。

秀<sup>ホタリ</sup>罈

高八寸五分

口徑三寸

胴周一尺七寸九分

咽周五寸六分





齋瓮

高一尺二寸七分

口径七寸七分

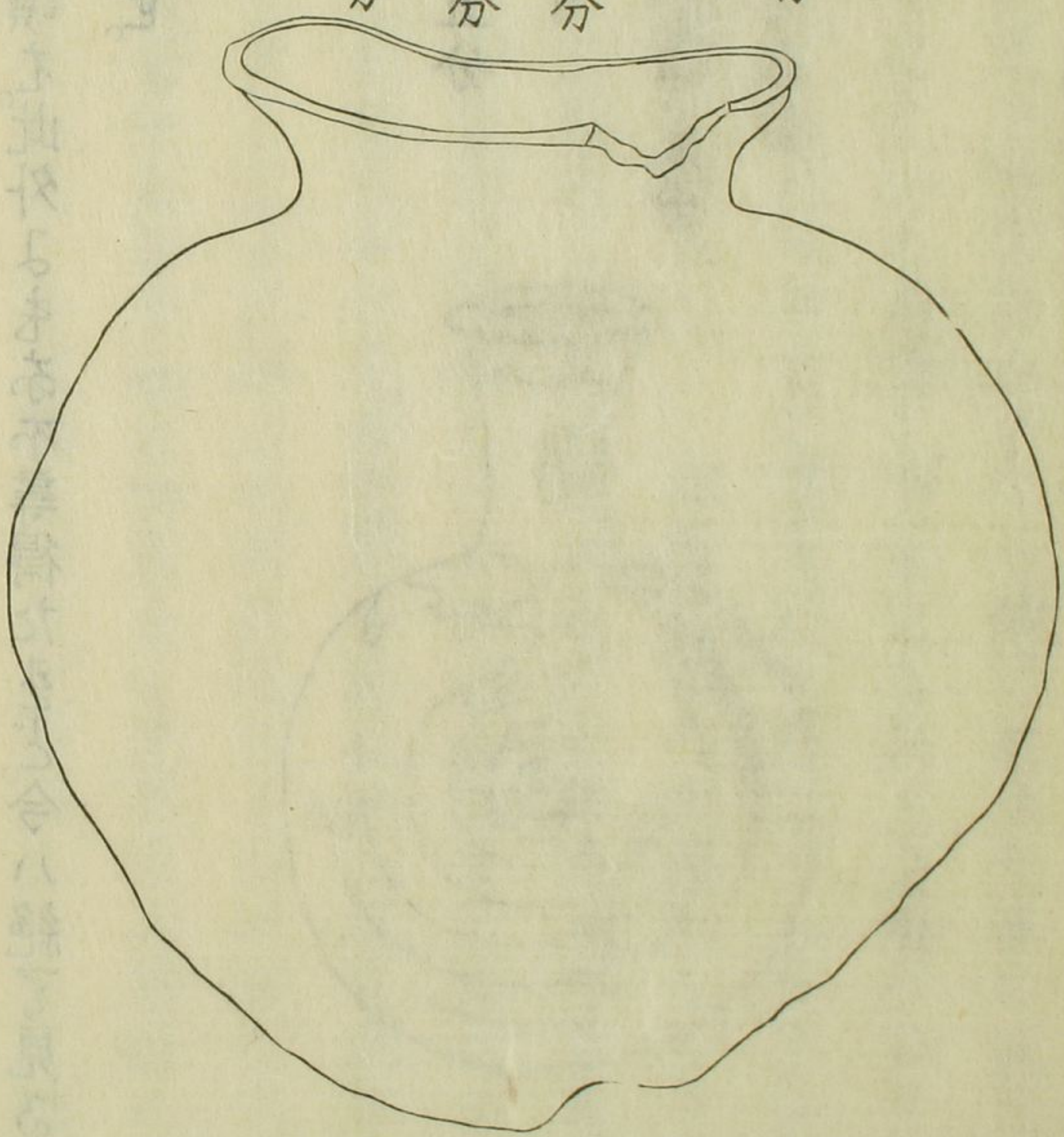
胴周二尺二寸七分

咽周一尺八寸三分

口欠中一寸九分

内總體青

海波押形



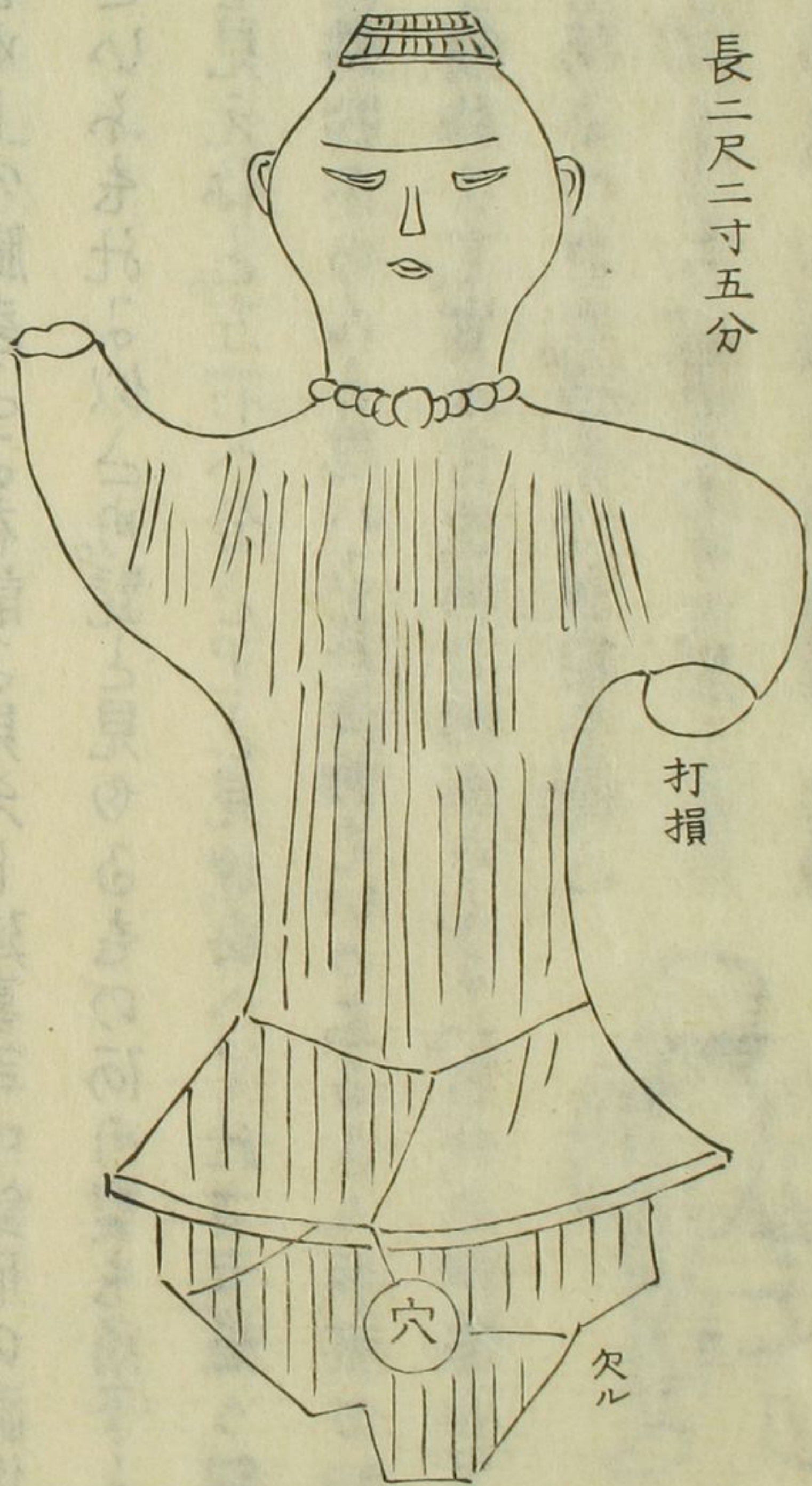
一 二荒山中禪寺より出立。走り大黒といふを筒袖にて膝  
 丈ゆ上の膨まるところを前より見えし。延喜年中鑄形の神像  
 といふも此に似たり。髭と見ゆるものゆり髪も角子と  
 を見え祿と。左右へ分と見ゆ。去へて此さま。鐵う銅  
 此鑄物あらんと思はる。其眞物をいうあるより。我察の如  
 く鑄物にて。實は古色ある物あらんは。古代の神像にて  
 もあるべきを。捧をつき袋を荷と  
 る状も阿まは。僧等走り大黒と名付  
 しあるべし。此類を追々尋廣く考渡  
 しれば上代の服を明し知らる事も有べし。後驗の爲記置。





左京硯耕舎藏 自武州兒玉郡若泉山所掘出物

長二尺二寸五分



明治二巳年八月廿二日板刻官許

彫工 木部嘉平房義

上代衣服考を。かきをへて後づらくくふ。

おもひ和まして。お布と絶ふ歌。

我國を。奇しきとふぞ。天地の。このまし時も。神にげは。何と  
けふとく。かむおとの。何とけことく。まつぬさふ。のま  
す。いとへて。國といふ。とふを多々ぞ。國といふ。國のおやど  
ふ。ちをやふ。神のみくよと。何とけらのふ。知ら延て。有々也。  
このけふまは。天降ましてし。皇御孫乃。この尊ゆ。ほのけき  
の。みやつきく。ふ。大御代を。法のしむひて。今しはし。百御  
代何ま也。年ハもと。何まと千とせも。經よれれ。何まの御  
神乃。とけしをも。このふ在けむ。人の世と。おとてし後も。の



みつ代也。以のふ所正々む。御代々々の。こふみそをまぎ。お  
まやけまほとへし。何れも。つばらふも。はとら延の由て。  
それまゝに。知ら延び有々正。我ハしも。若の正しよゆ。いふ  
し。及乃。學びの道ふ。入そ然て。身を賤けど。まふら男と。生し  
のらふ以のぞく。命れきをみ

大君れ。御爲よもの業。和の國れ。こた然よもがと。むらきも  
の。あゝろ。深然て。おもへ正し。其のひもれく。ぬ正に。多。お  
き。那と。お正ぬ。志のまど業。おこは。正ま。朝とひふ。歎の  
ふ。何ま正。年ま。祜く。何おぐ正を正し。上の代の。衣れ。さまを。  
此頃ぞ。考得と。ふ。古の。學び。れ。道ハ。やゝく。開々し。ゆけ

業。この。こちふ。まぐれし。人のか。まの。お。多。の。中。ふ。我ハ  
もと。數よも。何ら。ぬを。以の。にして。考得々。何お。何やし。お  
お。字。おもへ。む。世。れ。中。の。大。政。古。ふ。の。へ。さ。勢。ふ。ひ。物。毎。正。何  
ら。た。然。多。ま。ふ。御。代。お。ま。バ。神。れ。心。と。我。よ。し。業。示。し。ぬ。ひ。て。  
ま。何。正。ご。と。た。ま。々。ま。ふ。う。か。ふ。の。と。ふ。考。得。と。る。嬉。し。さ  
ふ。身。も。せ。れ。し。ら。び。此。書。を。以。あ。ぎ。持。て。か。し。お。々。と。き。こ  
え。何。げ。と。正。何。ま。つ。朝。廷。ふ。

○  
と。を。へ。て。志。る。人。も。お。死。神。こ。お。の。今。知。ら。延。く。ぞ。御。國。の  
ら。那。ふ。







神を我をいので考得し終とていのでしあろ。神やうけ  
らむ。

真心を盡志し加らにのしこしや。神はみけしを。神志らし  
めは。

のむみ我を考得し終。玉へ上し。神の御名をし。志らまくお  
もほ也。

神み我は。志ら延てし今。たもへ人。神はこけしを。奇しく何  
らばや。

わの國ハ。神のこけしを。傳へしを。思ひて何上し。心まのむ  
ぬ。

あふわさも。足やくとげも。やまらけき。神のこけしは。かむ  
わさからし。

神を我を。志らしめとまそ。いれ上し。志ら延て乃今。おど  
後のをまぬぬ。

のむを我の。としき。志らバ。たやゆよ。衣着あむ。神あ  
らふ身也。

いのおまを。神の授し。のむを我を。のへてけらしも。何らぬ  
衣也。

神を我ハ。今を傳へば。のみ代より。萬のはらぬ。わが國ふし  
て。







あふびとる。衣ふあまで。雄としのる。神のこけしを。人願ハ  
びも。  
學びあま。身よハぬさを。神こぎを。考得と。た。こま此むと  
また。  
あふゆよき。こけしおもへむ。よぎひある。衣を着まじ。神よ  
くまさむ。  
今也後。衣し縫を。たよゆよき。神のみけしふ。あらをれと  
むと。  
人ぶとふ。神のこまゑの。身ふしほまバ。神のこけしを。よそ  
ふまあ夢。

をぢあふ。我身よハほまむ。神こぞの。あら延し。のらふ。も  
ども。あらめやも。  
神こぎを。我を著まほし。世に人を。知らて延こしふ。あらふ  
と言とも。  
あふゆよき。神に雄とし。た。み々し。をも。軍衣を。以ほらぬゆ  
ゆ。也。  
あふゆよき。神の雄とし。き。みけしを。し。つ。祢の衣と。加るを  
ゆも。あらぬ。  
うはべを。し。よそほひぬとも。たよゆよき。神乃こけしを。下  
ふ着てまし。



我ハもよ。神のちちあり。幸ふくハ。考得めや。の英乃こけし  
を。

さちといへど。あべて身けさち。我幸ハ。身ふあまるはち。こ  
ぐひあきさち。

神をばふ。今考し。新むすの。を田をたくらぬ。みちの世けひ  
也。

神みぞの。此のむがへは。山くちぞ。葉山しきやほ。人とわ々  
あふ。

与きはまに。衣をつく。あせめとも。神のこけしふ。あよふ  
の英やも。

今らもや。神のこけしを。著げとて。も。神のこけしを。あぬび  
てをあらふ。

あけ頃を。我名けごとや。神をぞけ。翁とむすの。ひとふむむ  
延て。

神をぞの。翁の孫ら。神をばの。雄くしきハ。己の。くふぬ。己と  
しき。

旋頭歌

大御代の。以のでみとめと。以ばしこし和を

うれしの。衆神のみけしを。かむうへ得と。託。

去る國乃。延こしハ神け。こけしつゑへ。す



おや國乃。以ま祀ころ。崇ハ。加らころも。あ歌。  
神之。擧の。いは。志ら。延つ。ふ。うれし。さ。ら。あ。ま。

手うちて。崇。舞の。あ。ぞ。も。何。ま。足。ら。ぬ。を。も。

天の。日。死。神。乃。み。々。し。ぞ。志。ら。延。ま。は。は。し。

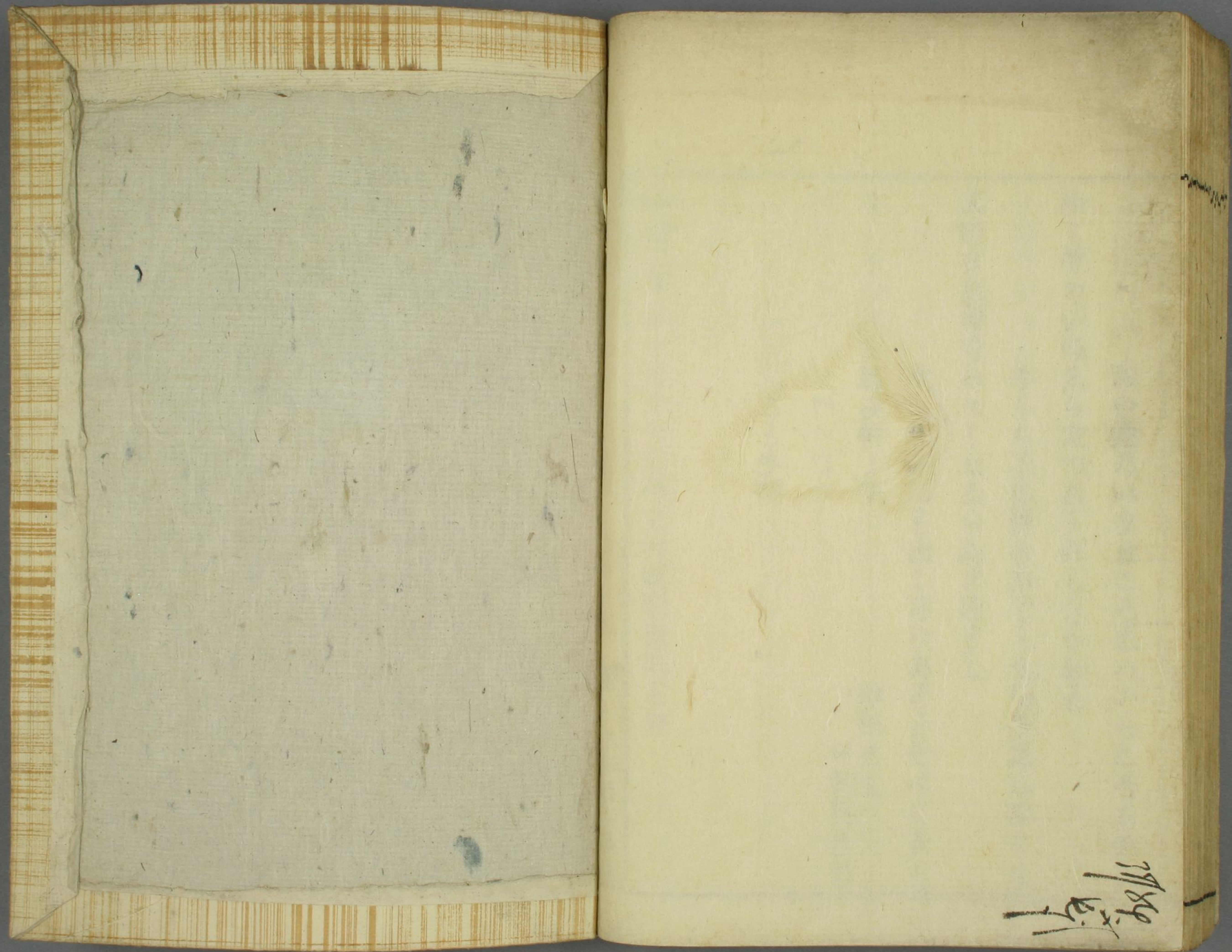
我ハ。世。ふ。何。ま。出。し。の。ひ。あ。は。と。や。以。を。ま。し。

神祇史生  
平朝臣長敦

明治三年年十月十七日序文并跋歌板刻官許

彫工 木邨嘉平房義





1880  
1/2



